

山梨県北巨摩郡大泉村

# 大和田遺跡

OHWADA NO.1 SITE

# 大和田第2遺跡

OHWADA NO.2 SITE

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1989・3

大泉村教育委員会  
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡大泉村

# 大和田遺跡

OHWADA NO.1 SITE

# 大和田第2遺跡

OHWADA NO.2 SITE

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1989・3

大泉村教育委員会

峡北土地改良事務所

## 序 文

ここ数年、考古学ブームが席巻しています。奈良県の藤ノ木古墳、佐賀県の吉野ヶ里遺跡等は端的なものです。しかし、ここで考えなければならないのはこれらの成果は純粋な考古学的研究を目的とした学術調査の産物ばかりではありません。それどころか圧倒的に多くが開発に先立って記録保存（実際上の遺跡の破壊）を前提とした緊急発掘調査によって発見された成果なのです。

村内でもこのような開発が進められてから10年以上の月日が過ぎました。中でも大規模なものは県営圃場整備事業です。毎年15～20万平方メートルという広大な面的工事は先人の永々と築いてきた貴重な遺産である遺跡の破壊を伴うものでした。我々は我々なりに努力した結果、記録保存という形を探ってこれに対応してきました。今日の様な国際的競争力を要求される農業事情を考えれば、農業の生産性を向上させるこの工事の意味は重要なものであるのは確かです。しかし本来そのままの形で子孫に残すべきこの文化遺産を完全でないまでも多くの部分を破壊せざるを得ないのは非情に残酷なことです。この様な中で金生遺跡の史跡指定、その整備、活用を前提とした環境整備工事への着手は我々の大きな活力となりました。

ここに上梓される運びとなった人和田遺跡、人和田第2遺跡の両遺跡発掘調査報告書もこの様な県営圃場整備事業に先立って行われた記録保存を前提とした緊急発掘調査の記録です。これらは世間を驚かす様な発見もなく、また、学説を覆す成果もありませんでした。しかし、ここに公表されるものは正に我々の祖先の残した生活の痕跡であり、その時代の全てでないまでもその一つの断面を我々に知らしめるものでした。これは二度と繰り返すことの決してできない生体実験にも似た大いなる実験の成果に他なりません。

ここに上梓されるこの調査報告書が村民の方々に広く活用されることを望むとともに、考古学、郷土研究の参考になれば幸いと思います。

最後に調査及び整理作業に関わった皆様、関係諸機関の皆様に対して深く感謝の意を表します。

平成元年3月

大泉村教育委員会

教育長 浅川義彦

## 例　　言

- 1 本書は昭和63年度県営圃場整備事業に伴う大和田遺跡、大和田第2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は峠北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
- 3 大和田遺跡は大泉村谷戸4552他に、大和田第2遺跡は大泉村谷戸4854他に所在する。
- 4 調査面積は大和田遺跡が3540m<sup>2</sup>、大和田第2遺跡が821m<sup>2</sup>である。
- 5 発掘調査期間 昭和63年5月26日～昭和63年9月9日  
整理作業期間 昭和63年9月9日～平成1年3月31日
- 6 調査事務局 大泉村教育委員会  
　　浅川義彦（教育長）・浅川哲男（課長）・藤原昭（係長）・齊藤正一・原かつみ  
　　調査担当 伊藤公明
- 7 発掘調査・整理作業参加者（敬称略、五十音順）  
　　相吉よしえ 浅川志寿恵 浅川達子 浅川日出子 浅川美代 浅川よし子 浦志真考  
　　浦志 恵 清水すみか 進藤きく枝 進藤由子 中島たね子 平井あさえ 平井仁志  
　　丸山あや子 三井種子 三井三枝子 三井光恵
- 8 本書の執筆、編集は伊藤が行った。
- 9 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御助言、御教示を賜わった。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）  
　　雨宮正樹 大島慎一 大森隆志 柳原功一 近藤英夫 桜井真貴 佐野勝広 末木 健  
　　諫訪間伸 長沢宏昌 中山誠二 新津 健 保坂康夫 八巻与志夫 米田明訓
- 10 本調査の出土品、諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。
- 11 本調査にあたり、山梨県教育庁文化課、峠北土地改良事務所、村上地改良区、地権者の皆様に御指導、御協力をいただいた。記して謝意を表したい。
- 12 本書使用地図は、国土地理院発行の1/5000八ヶ岳、韭崎、1/25000谷戸、山梨県発行県営圃場整備計画図1/1000、人泉村地籍図1/500である。
- 13 遺構平面図の方位は磁北による。一点鎖線は床面範囲を表す。焼土、礫の被熱範囲はドットのスクリーン・トーンで示す。また断面図中の礫の輪廓の入っていないものは調査がその下まで及んでいないことを表し、基準線の下の数字はその標高を示す。これは同一図版中は原則的に統一してあり、これ以外は全て表示してある。
- 14 遺物実測図のうち斜線は破損部分を表し、ドットのスクリーン・トーンは被熱範囲を表している。

## 目 次

序 文 .....	i
例 言 .....	ii
目 次 .....	iii
I 序 章 .....	1
1 調査に至る経緯と経過 .....	1
2 遺跡の位置と環境 .....	1
3 調査の方法 .....	4
II 大和田遺跡 .....	5
1 遺跡の概観 .....	5
2 調査の概要と経過 .....	5
3 調査の結果 .....	8
1 層 序 .....	8
2 発見された遺構と遺物 .....	8
i 尾根上の調査 .....	8
1) 住居址とその遺物 .....	8
2) 土壌とその遺物 .....	28
3) その他の遺構と遺物 .....	36
4) 遺構外出土の遺物 .....	37
ii 谷部の調査 .....	40
4 まとめ .....	48
III 大和田第2遺跡 .....	49
1 遺跡の概要 .....	49
2 調査の概要と経過 .....	49
3 調査の結果 .....	56
1 層 序 .....	56
2 遺 構 .....	56
3 遺 物 .....	58
4 まとめ .....	59
IV 成果と課題 .....	60
引用・参考文献 .....	63
図 版 .....	

# I 序 章

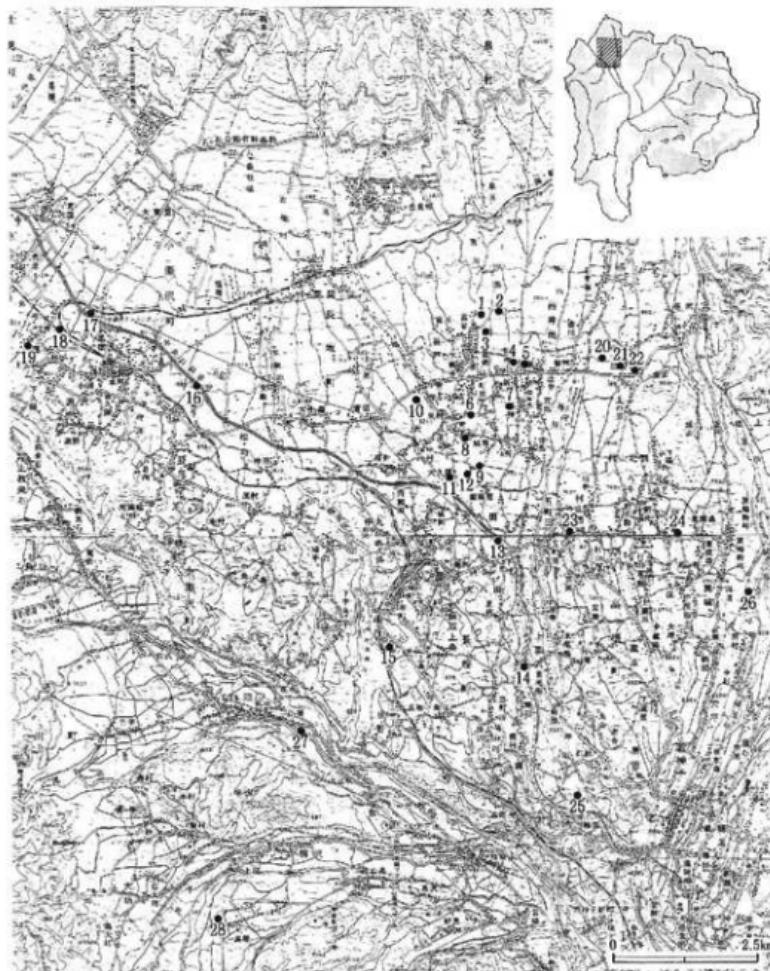
## 1. 調査に至る経緯と経過

昭和63年度県営圃場整備事業に伴い、村内では大和田工区約16万m<sup>2</sup>が開発される予定となつた。この地区内では周知の遺跡として地番4552を中心に大和田遺跡が所在する他は現土地利用状況がほとんど水田であったため遺跡の所在が確認できていなかった。このため、村教育委員会では昭和62年11月5日～12月17日にかけて開発予定地をほぼ網羅する形で試掘調査を行い、大和田遺跡の範囲と内容の把握及び他の遺跡の所在の確認に努めた。この結果大和田遺跡からは縄文土器、石器、中近世陶磁器片、埋設土器（縄文中期）が検出され、該期の集落址の埋没が予想された。また新たに地番4854を中心に縄文時代中期の遺物包含層が確認された。この結果より山梨県教育庁文化課、駿北上地改良事務所と協議を行い本調査を行うこととなった。調査対象面積は大和田遺跡が9,500m<sup>2</sup>、大和田第2遺跡が4,500m<sup>2</sup>であり、調査主体は村教育委員会があたることとなった。

その後、昭和63年1月5日、昭和63年度文化財関係国庫補助事業として県教育委員会に計画書を提出し、昭和63年4月15日付けで補助金交付内定を受ける。同4月28日補助金交付申請書を提出した。また、昭和63年5月10日、駿北土地改良事務所と大泉村との間で県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定を取り交わし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

## 2. 遺跡の位置と環境

大泉村はその北限で長野県と接し、その境界は八ヶ岳の主峰赤岳である。この八ヶ岳は南北21kmにわたり、赤岳をはじめ2,000m級の火山が列を為す複式火山であり、天狗岳以南の南八ヶ岳火山群と以北の北八ヶ岳火山群とに二分される。また八ヶ岳西南麓及び東麓は緩斜面の火山麓扇状地で、中期～後期更新世初頭にかけての礫層で形成されている。大泉村はこの南向きの緩斜面のはば中央に位置する。また、この斜面は東西を大地溝帯が走り、「七里ヶ原」と呼ばれる比高100mに及ぶ急崖を形成している。この断層に沿って西を釜無川、東を塩川の支流である須玉川が流下しており、甲府盆地に突き出た半島状の台地が形成されている。この八ヶ岳南麓台地は微視的には標高1,000m～1,500m付近に端を発する多数の湧水によって開析された南北に延びる痩せ尾根が連続しており、これらの尾根上から多数の遺跡が発見されている。今回調査された大和田遺跡はこの様な尾根上に立地した集落遺跡であり、大和田第2遺跡は谷部に形成された包蔵地である。



- 1 大和田遺跡 2 大和田第2遺跡 3 方城第1遺跡 4 純神遺跡 5 東純神遺跡 6 剣所遺跡 7 天神遺跡  
 8 豆生田第3遺跡 9 金生遺跡 10 葵屋敷遺跡 11 別当遺跡 12 大八田原田遺跡 13 柳坪遺跡 14 頃無遺跡  
 15 長坂上条遺跡 16 上平山遺跡 17 中原遺跡 18 沢の田遺跡 19 岩久保遺跡 20 石堂B遺跡 21 石堂A遺跡  
 22 野添遺跡 23 西原遺跡 24 青木遺跡 25 湯沢遺跡 26 川又南遺跡 27 根古屋遺跡 28 真平遺跡

第1図 周辺の地形と遺跡の分布



29 大和田第3遺跡 30 東原遺跡 31 谷戸城址 32 城下道跡 33 寺前道路  
34 須田遺跡 35 木ノ下・大坪遺跡 36 別当十三塚遺跡

### 第2図 遺跡位置図

第1図は当地域で発掘調査された主な縄文時代の遺跡の分布を示している。開発行為の多寡、開発規模の大小に影響された分布図とはなっているが、八ヶ岳南麓のこの台地上に縄文時代の主要な遺跡の集中する傾向が観取される。

この台地では丘の公園14番ホール遺跡をはじめ先土器時代から人類の生活の痕跡を残し、縄文時代になると隣接する長野県の八ヶ岳南麓から連続と続く縄文回廊と呼ばれるような一大遺跡群を形成する。この様な中で縄文時代前期末の天神遺跡、御所遺跡の存在は直接的に縄文中

期の巨大遺跡群の形成を方向づけるものとして注目される。即ち、有孔鉢付土器の祖形である有孔浅鉢や食料加工上重要な位置を占める石皿を多量に用い始めるというこの時期の特徴はそのまま縄文中期の文化を決定づける方向性を持ち、この地域にこの様な遺跡が存在したことは当地域の縄文中期の遺跡の増大を予見するものであったと言えるのである。縄文中期の調査された遺跡として村内では天神遺跡、山崎遺跡、姥神遺跡、方城第1遺跡等が挙げられる。近隣では柳坪、頭無の大規模集落、上平山遺跡、中原遺跡、西ノ原遺跡等が見られる。また県道バイパス工事で調査の対象となっている甲ツ原遺跡は今まで調査は行われていないが県内でも著名な該期の遺跡でありその成果が期待される。また從来あまり知られていなかった当地域の縄文時代後、晩期の遺跡も圃場整備事業の進展に伴い金生遺跡、青木遺跡、石堂B遺跡、姥神遺跡等の重要な成果を残し、その評価を一変させるものであった。これらは集落址に伴い配石遺構等が検出されており、その上耳栓やヒスイ製垂飾をはじめとする装飾品、石棒や石劍といった祭紀具、土偶等の出土遺物と合わせて高く評価されるものである。

第2図は遺跡の位置と周辺の発掘調査された遺跡の分布を示したものである。縄文時代の遺跡の他、平安時代～中世の遺跡が濃密に分布している。平安時代、北巨摩郡には三つの官牧が置かれていた。穗坂、真依野、柏前牧がそれである。この内柏前牧はこの八ヶ岳南麓の台地に設置されていたと想定されており、この経営に係わったと想定される高根町湯沢遺跡の他にも村内では城下、寺所、東原、原田といった諸遺跡が見られる。これらの遺跡からは墨書き土器や灰釉陶器が多量に出土し、石器等も出土している。これらの遺物の出土からこれらの集落は単なる消費集落ではなく、柏前牧の経営に何らかの形で関係した集落であったことが想定されている。

これらの平安時代の集落は谷戸城址、深草館址といった中世の城館址を支えるバックマーシュである中世の集落に継続していく。これらの遺跡、集落は互いに時間的、空間的に交流を持ち、今日の村の母胎となる集落を次第に形成してきた。

### 3 調査の方法

調査地点の選定は試掘調査によって明らかにされた遺跡の範囲の内、土地改良事務所から提示された圃場整備地区内の切り盛り目をもとに地表面から50cm以上1m以下の盛り土箇所以外をその調査地点としている。また道路部分については時間的な制約等から調査は不能であった。

調査の方法は両遺跡とも重機による表土除去後、任意の一点に基準杭を設定し、セオドライトで真北を測り出し、これからN $5^{\circ} 50' -W$ に偏して南北のグリッドラインと設定し磁北に沿って10mグリッドを設定した。その後除草等により確認精査し、各遺構の調査を進める方法を採った。また測量は10mグリッド杭を基準点としながら主に平板を使用し1/20の縮尺を原則として各遺構の記録を取った。また部分図等必要に応じ簡易通り方によって測量を行った。

## II 大和田遺跡

### 1. 遺跡の概観

大和田遺跡は標高932~938mを測る北東~南西方向に展開する幅40~50mの痩せ尾根の先端部に立地した集落遺跡で、その両側の谷部には遺物の包含層が認められた。

周辺の遺跡として南々東400mに方城第1遺跡が、北東300mに大和田第2遺跡が所在する。また今年度確認された大和田第3遺跡は北々東300mに位置する。その他にもいくつかの散布地として周知化された遺跡が周辺に存在する。

遺跡の現況の土地利用は、この遺跡の中核をなす尾根西側緩斜面が畑地、その周囲は全て圃場となっており、地形的な規制を強く受けた土地利用と言えよう。この内畑地部分は且つてナカッパラと俗称される荒れ地で、この東側はフカダと呼ばれ、江戸時代まで遡って圃場として活用されていたと言う。また、西側谷部は東側谷部と比較して開発の歴史は浅く、長く原野となっていた。

### 2. 調査の概要と経過

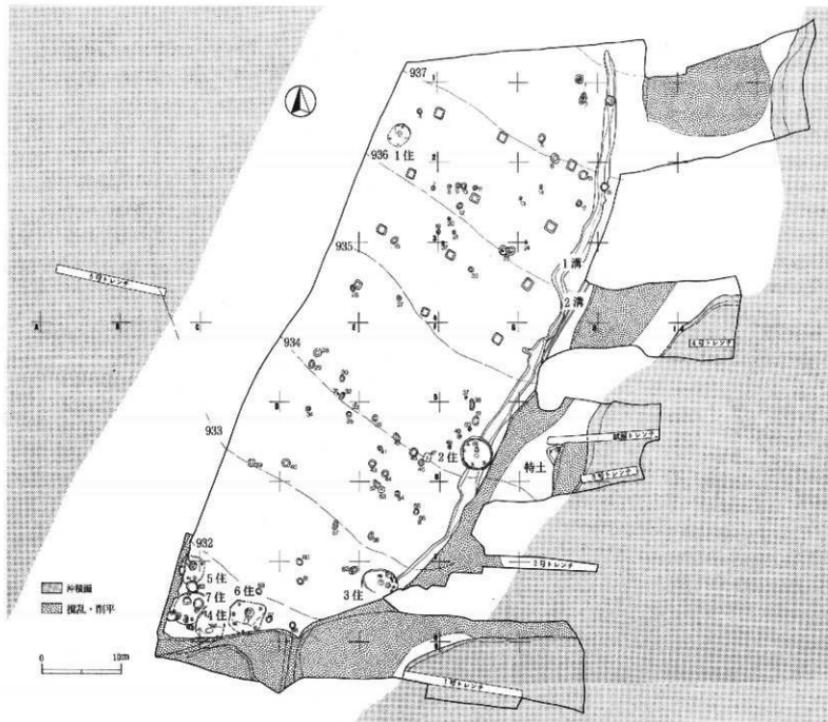
発掘調査は第1章3で明らかにしたとおり調査範囲を選定し、畑地斜面上部の任意の1点に基準杭を設定し磁北に沿った10mグリッドを設定し調査区全面にメッシュが張れるように西~東にA~L、北~南に1~9のグリッドを設定した。またベンチマークは工事用ベンチマーク

を利用して各杭に設定した。

発掘調査は昭和63年7月19日、大和田第2遺跡の発掘調査と併行して表土除去を開始した。確認作業は表土除去と併行して行われた。遺物の出土は少なく、作業は順調に進み、これの済んだ面から各遺構の調査に着手した。全ての調査が終了したのは9月9日で、9月13日に長坂警察署に埋蔵物発見届を提出した。その後直ちに整理作業に着手、平成1年3月31日整理作業が終了した。



第3図 大和田遺跡グリッド配置図



第4図 大和田遺跡全測図

### 3. 調査の結果

#### 1. 層序

本遺跡の調査では尾根上は表土が10~15cmと非常に浅く、またこの表土直下が大半の部分で遺構確認面となっており、僅かに斜面南端で表土下に暗褐色土の堆積が5~10cmの層厚で認められたに過ぎず、表土流出の顯著なことが窺える。この様な状況から遺跡の標準土層は設定し難い。また、谷部でも表土上下の止水層、客土層の直下が遺物包含層であり、その形成過程は窺い知ることができるが、その機能喪失以後の埋没過程は全く不明である。この谷部の層序は谷部の調査の項で述べていく。

#### 2. 発見された遺構と遺物

大和田遺跡から発見された遺構は縄文時代中期住居址7軒、特殊土壙1基、土壙68基、溝址2条、現代の積木坑12基であり、遺物は縄文上器（前期末～中期末）、石器（打製石斧、小型摩製石斧、凹石、磨石、石匙、石錐、石棒、石鐵、楔形石器等）、焼成粘土塊、中世～近代陶磁器片及び瓦器片であり、その量は整理箱に10箱程度である。

#### I 尾根上の調査

ここでは尾根上で検出された住居址や土壙について述べ、谷部の包含層の調査については別に後述する。

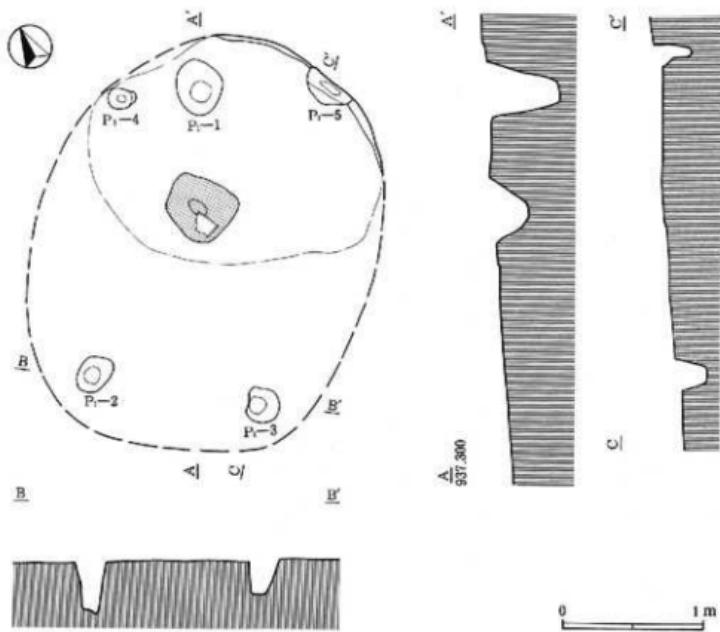
##### 1) 住居址とその遺物

ここでは調査時の番号順に記述を進める。また、7号住居址については整理作業の段階で認定したものである。

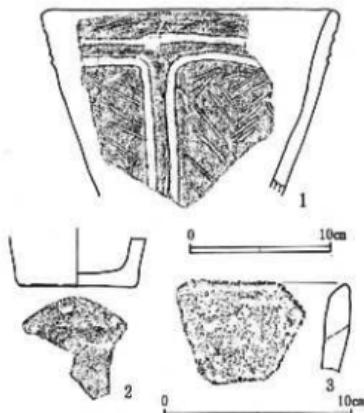
###### 1号住居址（第5図）

F-2区に位置し、南々東40mに2号住居址、南55mに3号住居址が所在する。表土直下、上面確認中に焼上粒子を覆土に多含する土壤状の落ち込みを確認。周辺を精査したところ柱穴状のピットを3穴確認し1号住居址と認定。調査を進める。

**形態** 人半が削平されており詳細は不明である。縦長の楕円形であろうか。  
**規模** 前述の理由から詳細は不明。長軸2.9m、短軸2.4m程度と推測される。住居址壁は北側の一部で残存するのみで最大幅も6cmを測るのみである。  
**主軸** N30°E  
**覆土** 北壁際の三角堆積が僅かに認められた。暗褐色土でローム粒子を多含する。  
**床面** 比較的軟弱な床面が炉周辺～住居北側に残存する。  
**炉** 50cm×44cmのやや不正な長方形プランの地床が住居址やや奥寄りに構築される。深さは25cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層は黒褐色、下層は暗褐色で共に焼上粒子、炭化物粒子、ローム粒子が見られる。炉底部～炉壁全体が強く被熱しており赤変して



第5図 1号住居址



第6図 1号住居址出土遺物

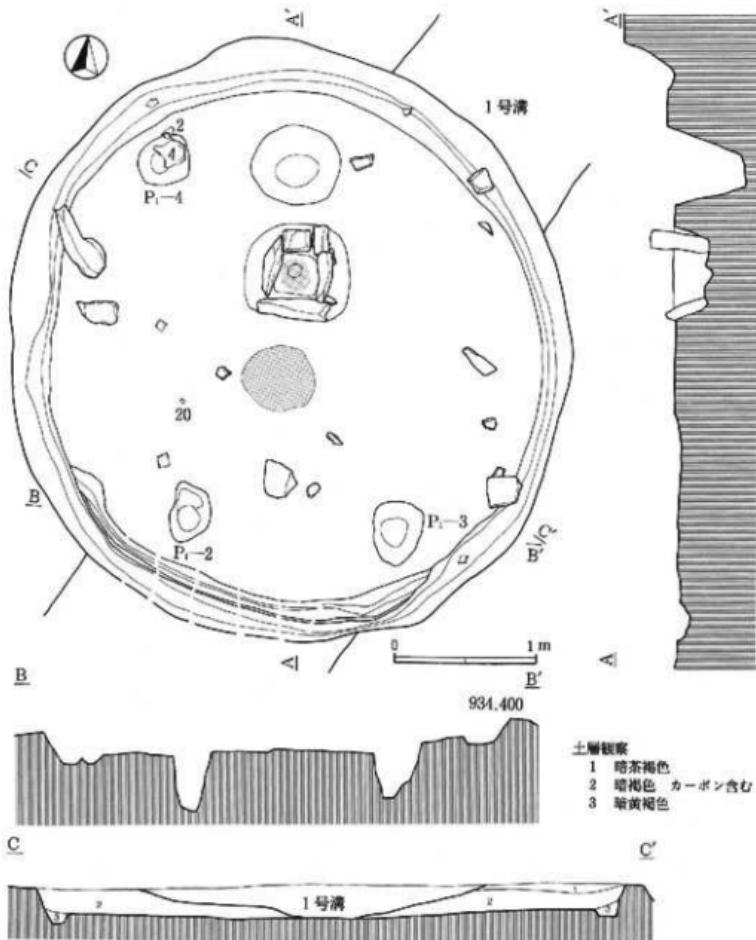
いる。ピット5本検出されている。内Pi-1～Pi-3が主柱穴となる。これらは何れも覆土が暗褐色で炭化物粒子を少量含みローム粒子を多量に混じている。Pi-4、Pi-5は規模的にも小さく支柱的な性格のものと思われる。遺物出土状況 第6図に示した3点は全て炉址内から出土したものである。また、Pi-1からは取り上げは不可能であったが獸骨片と思われる有機物が検出されている。

#### 遺物（第6図）

1は深鉢形土器（以下深鉢）の大形破片である。懸垂文区割の中にヘラ状工具によるハの字文が施文される。2は深鉢の底部である。底部はヘラナデされる。

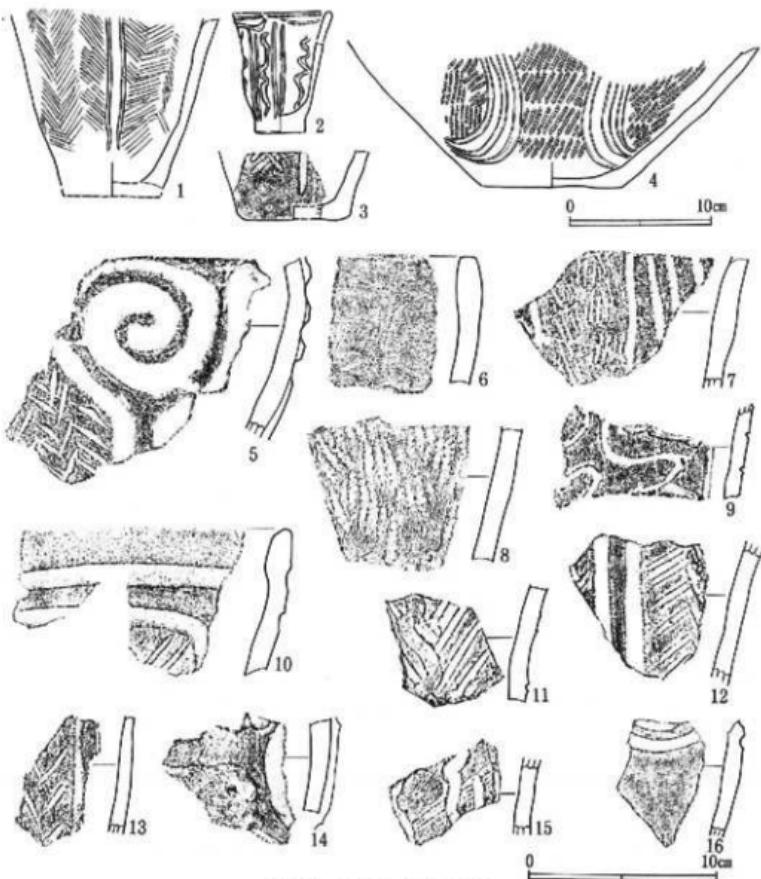
2号住居址（第10図）

G-6区に位置し、北々東40mに1号住居址、南西20mに3号住居址が所在する。この住居址は試掘時のトレンチ調査で住居址状の落ち込みとして確認されていたものであるが、トレンチを入れて周溝、床面、炉石を確認した段階で改めて2号住居址と認定し、以下調査を行った。また、住居址中央上層を1号溝址が切り込んでいるが、この1号溝址は現土地利用の規制を強く受けたもので、前述のとおりこの畠地の開発が現代に入ってのことを考えるとその構築時期

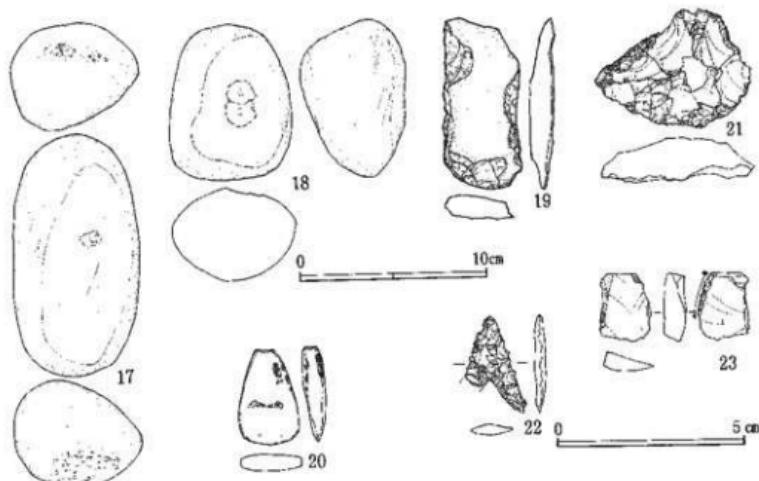


は現代のものと思われる。ここでは時間的制約からあえて逆掘りして調査を進めた。なお本住居址はこの集落の中で最も良く遺存する住居址である。

形態 ほぼ正円形。規模 長軸4.25m、短軸3.97mを測る。壁高は最大で30cmを測る。主軸 N-3°-W 床面 南側は1号溝址の擾乱等で凹凸が目立つが、全体に堅緻でしっかりした床面となっている。周溝 南側の一部は1号溝址の擾乱により不明な点を残すがそれ以外は全周している。また南側で周溝が2本となり住居の若干の拡張、修復の痕跡と見られる。また周溝中に小ピットが数本穿たれていた。なおこの住居址は本集落中唯一周溝をもった住居址である



第8図 2号住居址出土遺物

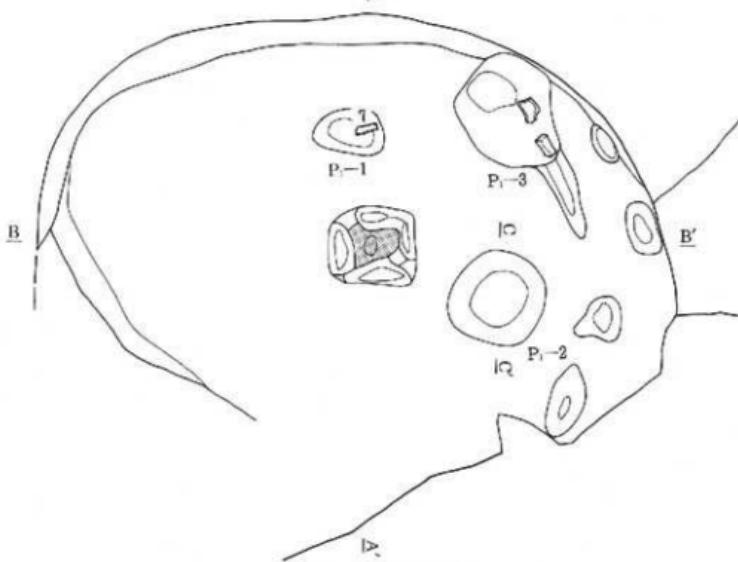
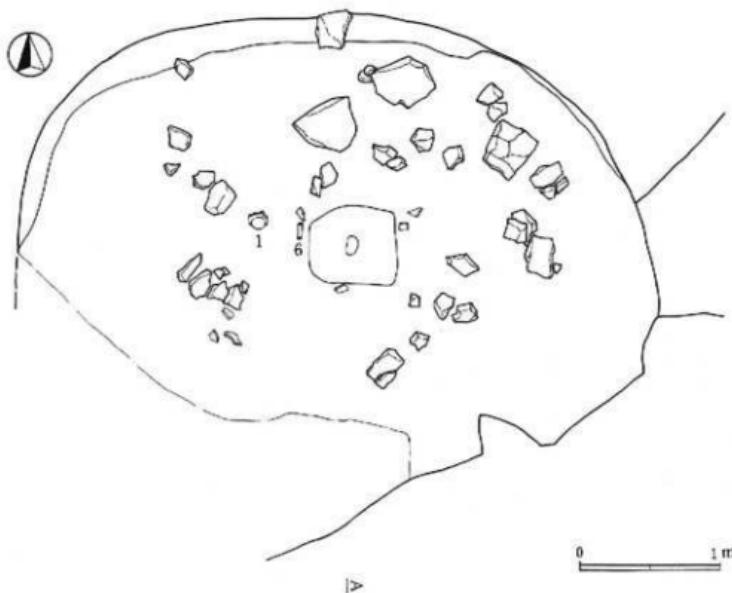


第9図 2号住居址出土遺物(2)

る。 炉 住居址中央北寄りに76cm×64cmの横長の長方形プランの石圓いが見られる。これらに使用された炉石の内北側のものは細長い鉄平石を縦に配置したものである。住居址の炉周辺から石棒等の検出されることが多いことからこれは石棒、立石と同様の機能を持ったものと思われる。また、住居址中央には52cm×47cmの略円形プランの地床が見られる。これは掘り込みのないもので、表面は赤変、硬化が顕著である。 ピット 4本検出されている。内P<sub>i</sub>-1～3が主柱穴となる。P<sub>i</sub>-1は中でも規模が大きく、柱抜き取りに際する三角堆積が確認されている。またP<sub>i</sub>-2、3の覆土中には炭化物粒子、焼土粒子の混入が見られた。 遺物出土状況 床面から浮いた状態で全体から散漫に出土している。なお第8図-2は原位置を保っていると判断される。また炉址中から炉石の石材として第9図-17の磨石が検出されている他、図化できなかったが炉址中から焼成粘土塊の断欠が出上している。

#### 遺物（第8、9図）

1.3～15は深鉢である。この内5、6、14はX字状把手付大型深鉢である。この大型深鉢を除外すると縫帶による区割、施文の見られるものは皆無である。地文について見ると櫛齒状工具による綾杉状の施文の見られるものとして1.10～12.15が見られる（10～12は同一個体）。同様の原体による押引き文の見られるものとして7が見られる。ハの字文の見られるものとして3.13が挙げられる。2はミニチュア土器で蛇行沈線の施文が見られる。16は浅鉢型土器（以下浅鉢）である。17、18は安山岩製の磨石である。19は打製石斧である。20は小型磨製石斧で装着痕が見られる。21は黒曜石製の石匙である。22は黒曜石製の石鏃で一部欠損する。23は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

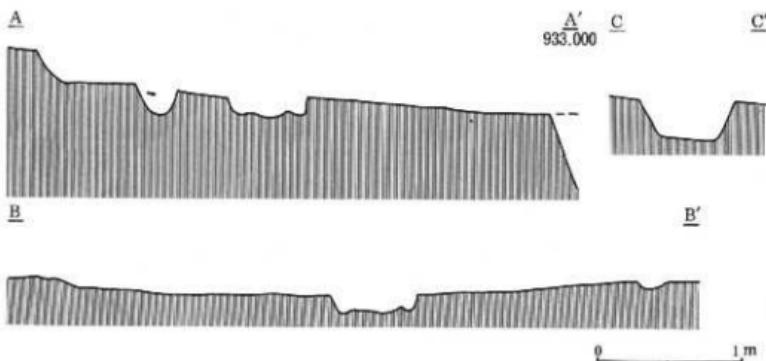


第10図 3号住居址

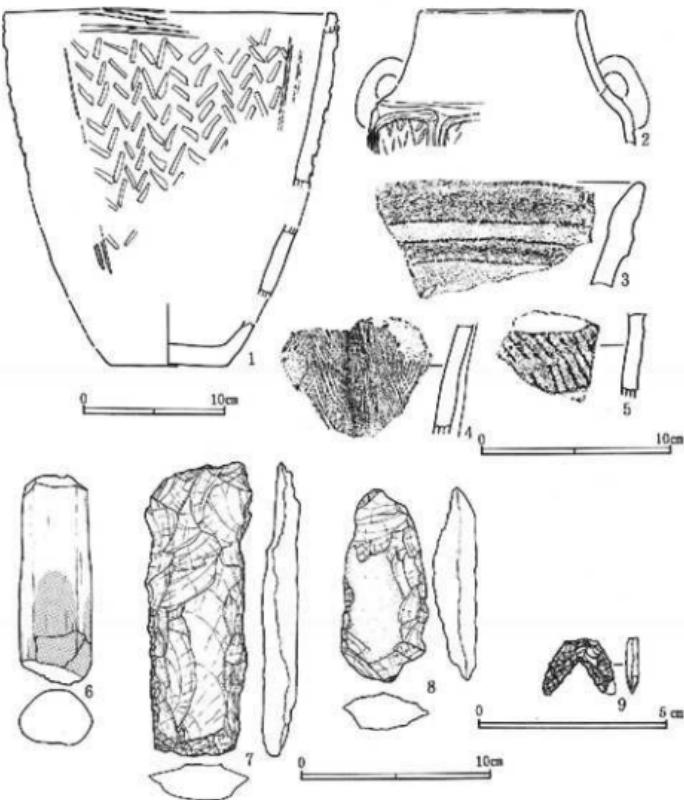
### 3号住居址（第10、11図）

F-8区に位置し、北東20mに2号住居址、西17mに6号住居址が所在する。表土除去後の確認作業中にプランは明確にはならなかったが鉄平石が集中する暗褐色土層の落ち込みを確認。ベルトを十字に設定し、遺物を残しながら掘り下げたところ、底面中央に石を抜き取られた石囲い炉を検出した。この段階で3号住居址として認定して以下調査を進めた。

**形態** 南北を表土流出及び田普請時の削平により欠失し詳細は不明である。椭円形プランであろうか。  
**規模** 前述の理由から詳細は不明。短軸は4.47mを測る。住居址壁は北側の一部に残存するのみで、遺物等の出土状況から設定した床面からの高さは10cm前後である。  
**主軸** N-2°-E  
**覆土** 暗褐色で炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。北壁際にはローム粒子をやや多く含んだ土層の三角堆積が認められた。  
**床面** 鉄平石の面的な分布と土層の観察、炉址の検出状況、掘り上がり底面の凹凸の多さ等から貼り床の行われたことを想定する。しかし調査をしていて硬化面は全く確認されなかった。  
**掘り方** 前述のとおり底面は凹凸が目立つ。また掘り方底面を検出した段階でピット、炉が検出されている。掘り方埋土は暗褐色土で炭化物粒子を少量含む。  
**炉** 62cm×55cmの長方形プランの炉が住居址中央から検出されている。その抜き取り痕から石囲い炉であったことが想定される。炉底部は被熱し赤変している。  
**ピット** 7本検出されている。東壁側の小ピットが柱穴となるのであろうか。内P<sub>i</sub>-2はこの住居の施設ではなく単独の土壤であった可能性がある。一応ここでは貯蔵穴状の機能を想定しこの住居の施設と認定した。この覆土は黒褐色土で炭化物粒子を含む。他のピットの覆土は暗褐色系のもので炭化物粒子を少量含むものであった。  
**遺物出土状況** 土器は鉄平石の上下から小破片となって出土している。6は炉址周辺から、7はP<sub>i</sub>-1の覆土上層から出土している。埋納されたものであろうか。8は住居址南側の擾乱部分から出土したものであり問題を残すが共に出土した土器の大型破片が1の破片と接合していることから住居址の遺物として扱った。9は鉄平石



第11図 3号住居址断面図



第12図 3号住居址出土遺物

の下から出土している。

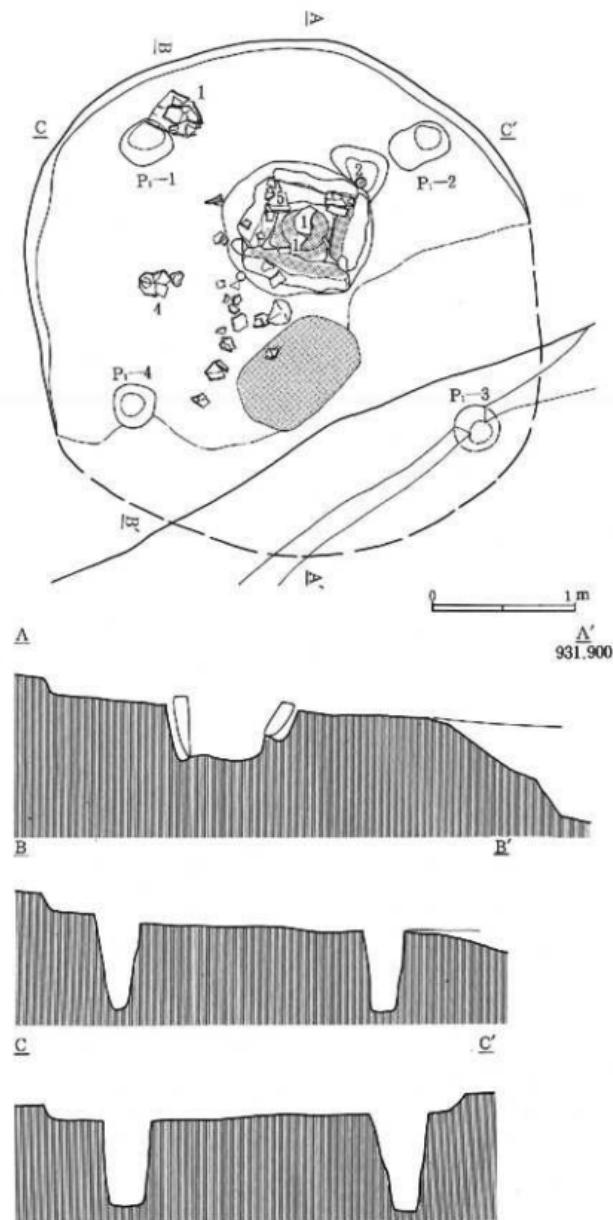
#### 遺物（第12図）

1は口縁部の大型破片と接合しない完存する底部から器形を復原したものである。口縁部は沈線の施文の様子から波状口縁となる可能性が若干ある。体部のハの字文はヘラ状工具の小口ででも施文されたものであろうか、幅が広く深く施文されている。底部は一定方向のヘラナデが見られる。底部は強く被熱し、赤変が見られる。2は壺型土器（以下壺）である。把手は2単位であろう。口縁部%、体部若干が残存する。体部のハの字文はヘラ状の工具による。口縁部外面～体部内面は丁寧にヘラミガキされている。6は石棒の断欠である。一部被熱している。7、8は打製石斧である。共にほとんど完形である。9は無茎の石鎌の断欠である。黒曜石製である。

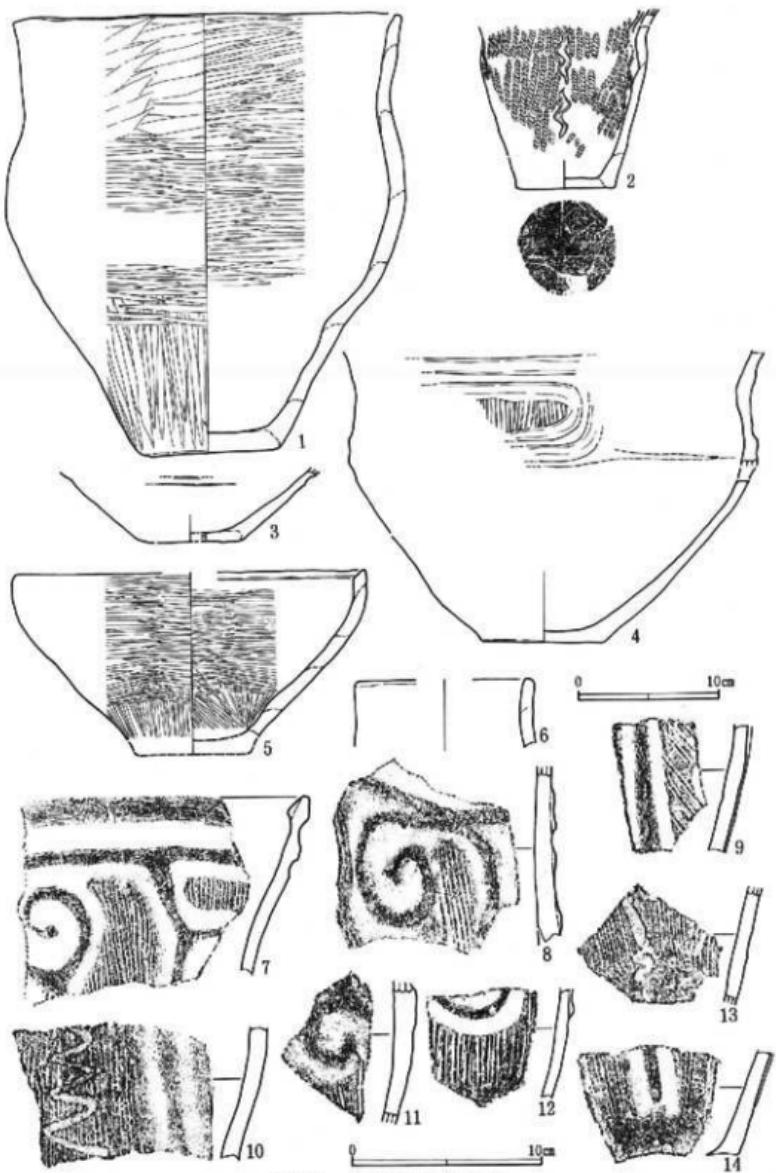
4号住居址(第13図)

CD-8区に位置し、北西部を一部7号住居址に削平される。西1mに6号住居址、北4mに5号住居址が所在する。CD-8区の遺物をドットを落として取り上げながら掘り下げてプランを確認した。プラン的にもほぼ円形で、規模的にも住居址を想定できるものがあり、この段階で4号住居址として認定し以下調査を進めた。

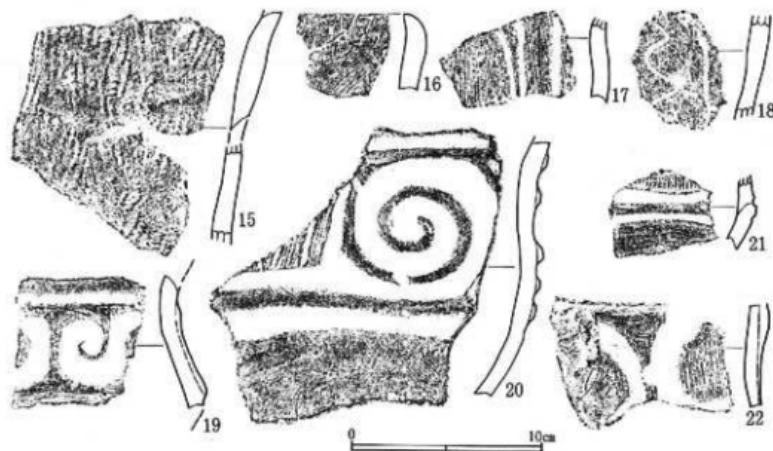
**形態** 南半を削平され不明な点を残すがほぼ円形のプランが想定される。 **規模** 長軸は柱穴位置等から3.7m前後が想定され、短軸は3.55mを測る。壁高は残りの良い部分で15cm程である。 **主軸** N-22°-E **覆土** 暗褐色を呈し炭化物粒子を少量含む。 **床面** 南半は耕作による攪乱、削平により不明な点を残すが全体に軟弱である。



第13図 4号住居址



第14図 4号住居址出土遺物



第15図 4号住居址出土遺物

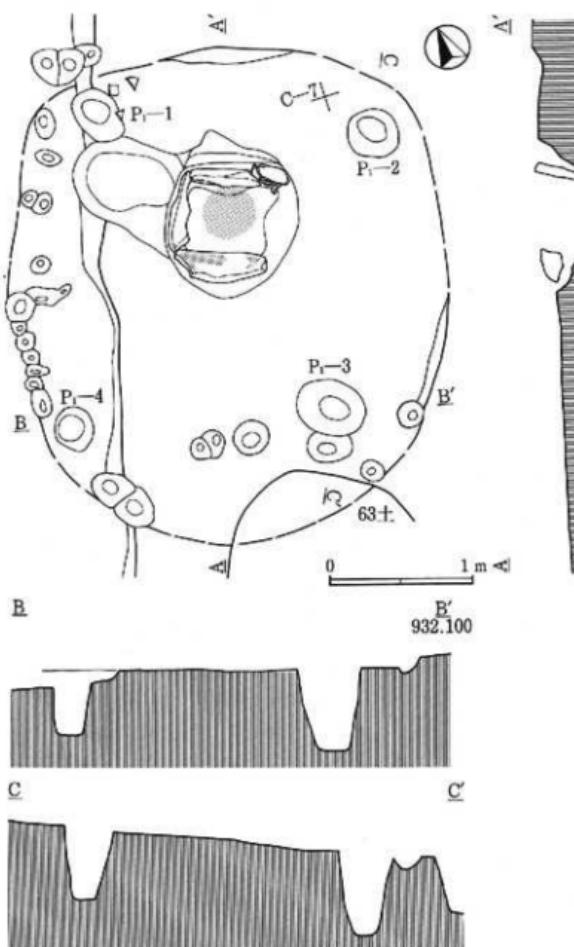
**炉** 住居址中央北寄りに108cm×95cmの略方形プランの掘り方の石囲い炉が見られる。深さは38cmを測る。炉底部は被熱し赤変している。また、この炉の北東コーナーに接続して不整形プランの浅い掘り込みが検出されている。これは炉と関連した施設であろうか。この炉の他に住居址中央南寄りに地床炉が見られる。これは93cm×58cmを測る略方形プランを呈し、掘り込みは見られない。 ピット 4本検出されている。何れも主柱穴として想定されるもので、覆土は暗褐色を呈し炭化物粒子を少量含む。

**遺物出土状況** 住居址中央の覆土中よりやまとまつて遺物が出土している。この内注目されるのはP<sub>1</sub>-1上面で検出された土器と炉址中～上層から出土した土器片が接合していることである。（第14図-1）即ちP<sub>1</sub>-1上面のものが類完形個体で出土していることを考慮して原位置を保っていたと仮定するならば、廃棄の段階で完形だったものを後に一部を打ち欠き炉址中に投入したものと考えられる。（炉址内の覆土観察からこれは故意に埋戻されたものと判断される。）これはいわゆる吹上パターンと言われる住居址内の遺物廃棄を検討する上で示唆を含むものである。

#### 遺物第14、15図)

1、2、7～18は深鉢である。1、8、15はやや大きめのもので、2は小型のものである。1は無文で粗雑にヘラミガキされる。完存する。2は底部ほぼ完存、胴部 $\frac{1}{3}$ が残存する。底部には木葉痕が明瞭に残る。3、5は浅鉢形土器（以下浅鉢）である。共に大型破片を復原実測したものである。4、19～22は鉢型土器（以下鉢）である。4は底部完存、胴部 $\frac{1}{3}$ が残存する。6は広口壺の破片を復原実測したものである。これらの文様を見ると底隆帯+沈線で渦巻文あるいは懸垂文を表わしたものが多く、地丈は縦経線文を施文したものがほとんどである。また、石器の出土は見られなかった。

5号住居址（第16図）



第16図 5号住居址

る。 主軸 N-18°-E 覆土 僅かに残された覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含んだものであった。 床面 上述のとおり軟弱で、住居址西側は道路により削平されている。

炉 住居址中央北寄りに97cm×96cmの略方形の掘り方の石囲い炉が検出されている。炉底部は強く被熱しており赤変が見られる。また、この北辺と西辺に接続する不整形の掘り込みはが石が移動していないことからこの炉が構築される以前に掘り込まれたことが明確であり、その機

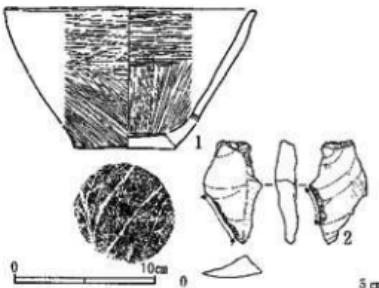
C.D-7、8区に位置し、北々東60mに1号住居址、南西5mに6号住居址、南1mに7号住居址が所在する。この住居は重機による表土除去の際、表土直下から石囲い炉が検出され住居址と認定されたものである。

形態 ほとんどの部分で床面レベル近くまで削平され壁が一部しか検出されなかつた上、床面も軟弱な為不明な点を残すが住穴位置、小ピットの配置から梢円形プランが想定される。規模 上述の理由から長軸3.5m前後、短軸3.1m前後と推定される。壁高は最大でも10cm程度であ

能は不明であるが、少なくともこの炉と直接の関連は想定できない。 ピット 住居址内から25本検出されている。また住居址想定プランから外れる北西コーナー附近の3本もこの住居址に帰属するものであろう。これらの覆土は共に暗褐色を呈し、炭化物粒子、ローム粒子を少量含むものであった。また、住居址西辺に密集する小ピットは分布にバラツキがあり疑問を残すが一応柱穴としての機能を想定しておく。これらの覆土はほとんどが暗褐色土であった。

遺物（第17図）

1は浅鉢である。L1径17.8cm、器高9.9cmを測る底部から外上方へ直線的に立上るもので、内外面共にヘラミガキされている。底部には木葉痕が明瞭に観察される。底部完存、体部%が残存する。2は黒曜石製の使用痕のある剥片である。



第17図 5号住居址出土遺物

遺物（第17図）

1は浅鉢である。L1径17.8cm、器高9.9cmを測る底部から外上方へ直線的に立上るもので、内外面共にヘラミガキされている。底部には木葉痕が明瞭に観察される。底部完存、体部%が残存する。2は黒曜石製の使用痕のある剥片である。

#### 6号住居址（第18図）

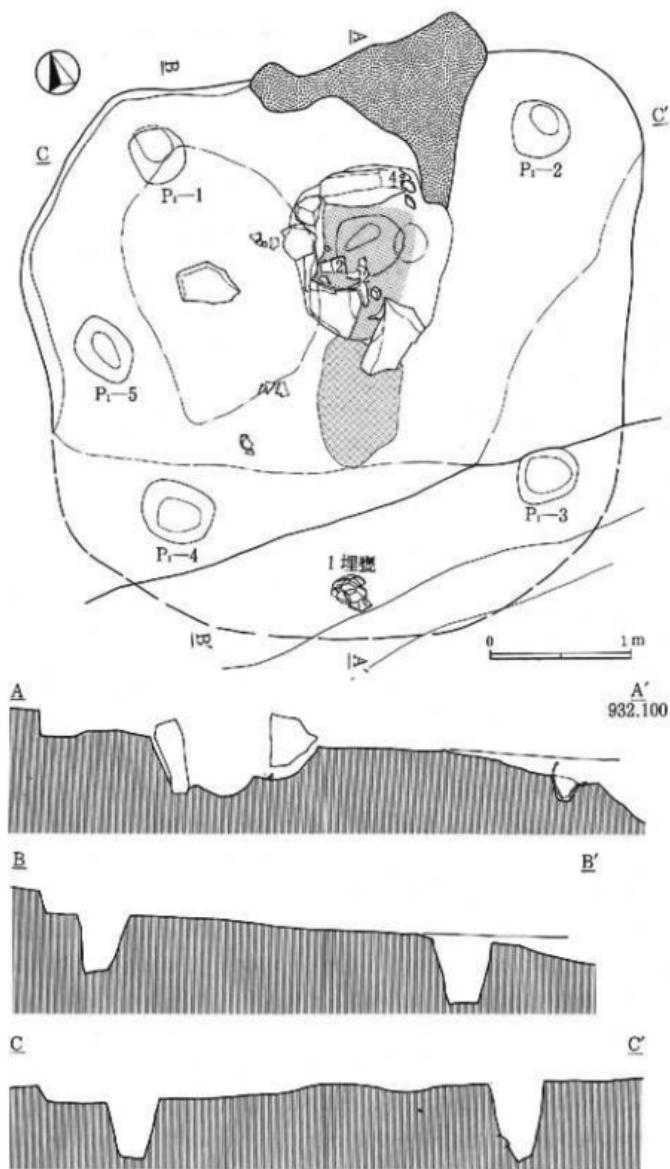
D-8区に位置し、西1mに4号住居址、東17mに3号住居址、北西5mに5号住居址が所在する。表土直下より焼上を多量に含んだ十層が面的に検出された。これにベルトを十字に設定し振り下げたところ巨大な石を配した土壤状の落ち込みを確認したが、その規模から単独の土壤と判断した。その後周囲を精査していく中で柱穴状のピット、住居址壁の一部確認、埋甕を検出したことにより改めて6号住居址として認定し、以下調査を進めた。

形態 表土流出、削平等により一部不明な点を残すが略方形のプランが想定される。 規模 上述の理由から不明な点を残すが短軸は4.0m前後が想定され、長軸は4.37mを測る。住居址壁は西辺の一部～北辺の一部までしか検出されなかったが、壁高は最大で16cmを測る。 主軸

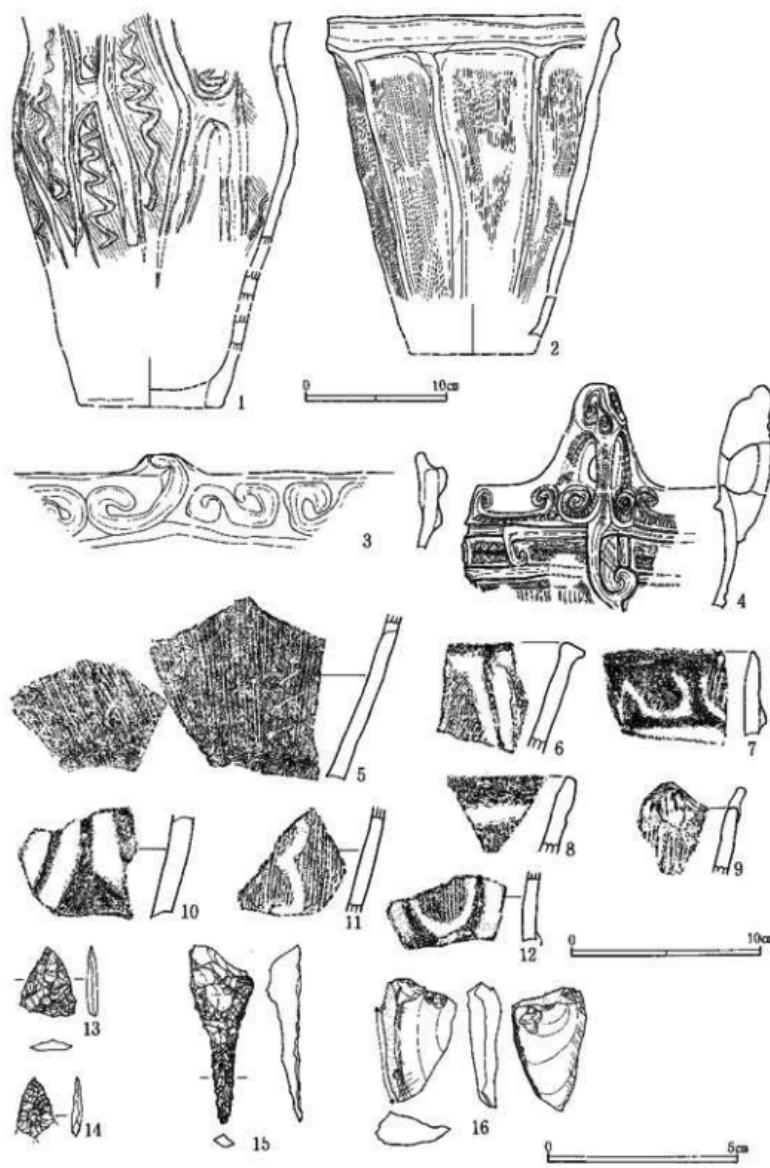
N-16°-E 覆土 住居址上層西側に偏して焼土を多量に含んだ橙褐色土層が見られた他、焼土粒子、炭化物粒子を含んだ暗褐色土層が見られた。これらは投入されたものであろうか。

床面 上述のとおり、表土流出、削平等により一部不明な点を残すが、全体に堅緻である。

炉 住居址中央北寄りに125cm×116cmの方形石囲いが検出されている。炉石には極めて大きな石を用いて構築されている。東辺の炉石は住居址廃棄後抜き取られ、西辺の炉石は一部打ち欠かれたものが住居址上層の焼土層中から検出されている。覆土下層は焼土單一層で層厚5cm前後を測り、炉底部は強く被熱し、赤変が見られた。また、この石囲いがの南辺に隣接して90



第18図 6号住居址



第19圖 6號住居址出土遺物

cm×58cmの不整形プランの地床炉が見られる。これは掘り込みをもたないものである。ピット5本検出されている。この内P<sub>i</sub>-1～4が主柱穴と想定される。これらは規則正しく四隅に配置されている。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含む。

**埋甕** 住居址中央南端に1体検出されている。住居址床面レベルの延長から頸部以上を打ち欠いたものであったことが想定される。また底部は穿孔されている。

**遺物出土状況** 炉址中から比較的まとまって出土している。注目されるのは第19-4の出土状況である。これは唐草文系の搬入土器であるが、この突起部分は炉石上から、他の破片は炉址の掘り方から検出されている。即ちこの土器は住居址内に持ち込まれた段階で既に破損していたことが窺えるのである。また突起部だけを炉石の上に配置（積極的な行為と解釈したい）したのはこれにマジカルな意味付けが為されていた可能性を示唆するものであろう。

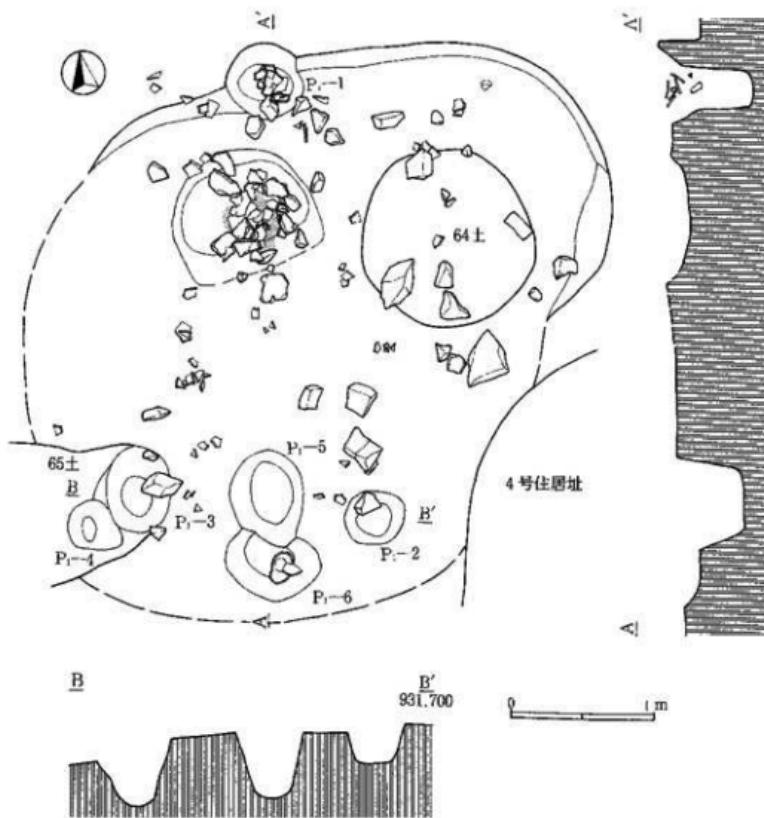
#### 遺物（第19図）

図化できた土器は全て深鉢である。1は埋甕で底部は穿孔されている。残存高28cmを測り、底径は10.2cmを測る。胴部上半を中心に隆帯と沈線によりH字状の施文が見られ、胴下半は雑にヘラナデされる。2は炉址中より出土している。これは条線施文後隆帯を貼付けたものである。この時期普遍的に見られる隆帯+沈線による文様描出の手法はとられていない。3は口縁部文様帯をもつ大型深鉢の口縁部片である。4は前述のとおり唐草文系の搬入土器である。口縁部1/4が残存する。5は条線文を地文とし、沈線、隆帯で縦区割をしないものである。蛇行沈線は8単位であろう。13、14は黒曜石製の石鎌で、共に無茎である。15は黒曜石製の石錐である。16は黒曜石製の二次加工のある剥片である。

#### 7号住居址（第20図）

CD-8区に位置し、北辺で63号土壙と接し、同じく北1mには5号住居址が所在する。また、南東部の一部は4号住居址を削平して構築されている。土器形式上同一時期と考えられる1号住居址は北々東64m、2号住居址は北東40m、3号住居址は東24mに位置する。CD-8区を中心とし表土直下より黒褐色土が広がり、頭初遺物包含層として認識し遺物を取り上げながら掘り下げていった。この過程で4号住居址のプランが確認された他、周囲の土壙の所在が確認された。即ちこの段階で既に住居址床面まで掘り下げられており、結果的には逆掘りになってしまった。その後住居址壁状の立上りを確認、また土器の埋納された土壙がその底部を強く被熱し赤変してゐるのを確認し一応住居址として想定も可能となつた。整理の段階でこれらを改めて検討した結果7号住居址として認定するに至つた。

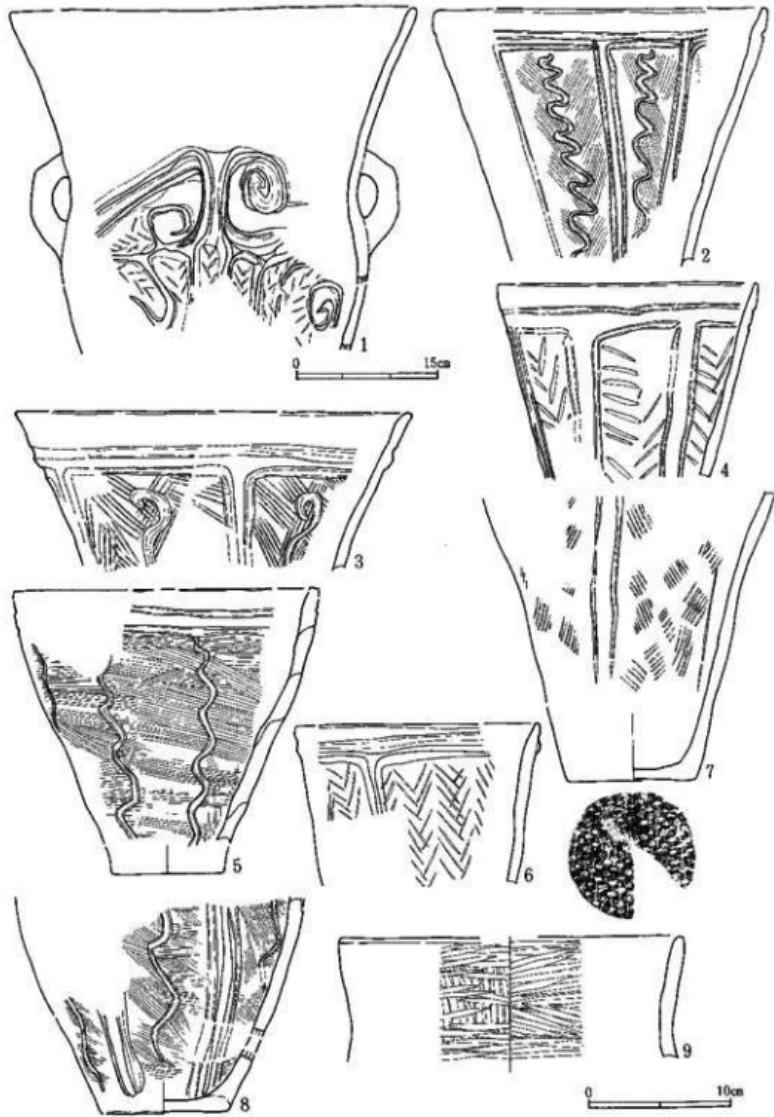
**形態** 不正円形が想定される。  
**規模** 上記の理由で不明な点を多々残すが一応長軸4.1m、短軸3.7m前後と想定しておく。壁高は残りの良い部分でも10m前後を測るのみである。  
**主軸N-11°-E 覆土** 上記のとおり上層は炭化物粒子を含んだ黒褐色土層で粘性、しまり共に弱い。下層は暗褐色土層でローム粒子を含み炭化物粒子を少量含む。  
**床面** 軟弱な床面で硬化面は特に認められなかった。  
**炉** 上述のとおり頭初上器、礫を投入した墓壙的な性格の強



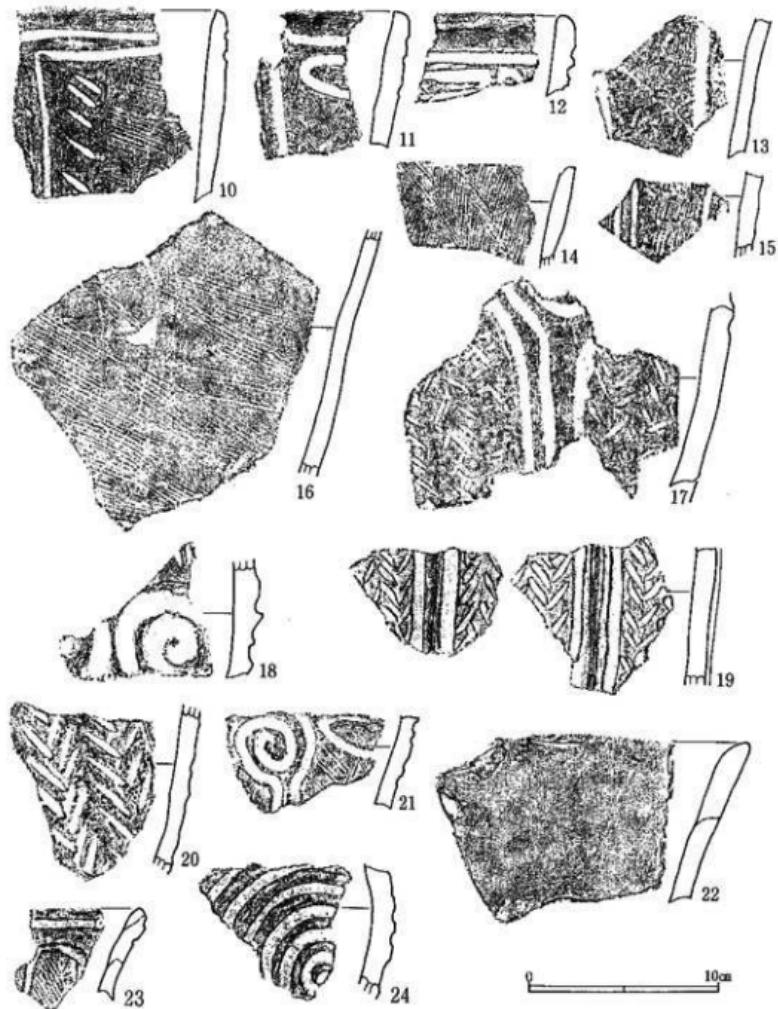
第20図 7号住居址

い土壤と考えられたが、その後炉址として認定した。これは石の抜き取り痕が無く、地床炉と考えられる。規模は長軸104cm、短軸は擾乱により不明な点を残すが90cm前後と推定される。深さは21cmを測り、その形状は浅い皿状のものとなっている。また、この炉の主軸は住居址の主軸よりも西に偏して構築されている。この炉中から第21図一1.7の上器が拳大～人頭大の礫と共に検出されている。ピット6本検出されている。この内P1-1～4が主柱穴と思われる。これらの覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含みローム粒子の混入が多く見られた。これらの内P1-1の上層には炉から検出された第21図一1と同一個体の破片が検出されている他、ピット中位から炭化したオニグルミの殻が検出されている。

遺物出土状況 覆土上層の黒褐色土層から比較的まとまって遺物が出土している。これらの多くは細片となって検出されており、復原しても½以上残存するものは第21図一8の1個体だけである。これは表土流出やその後の削平、

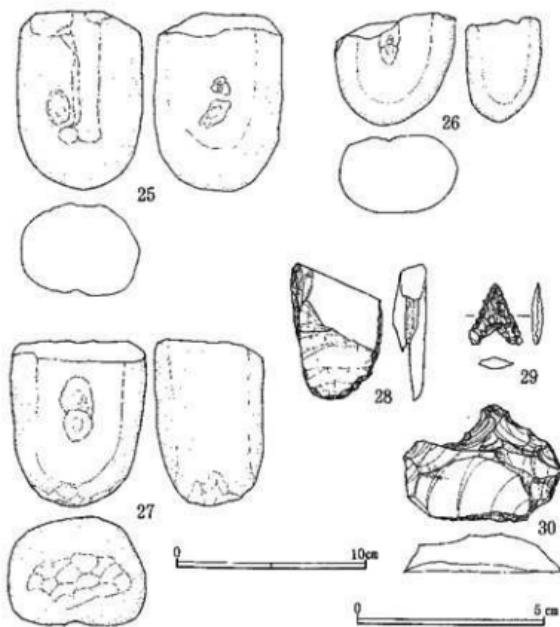


第21図 7号住居址出土遺物



第22図 7号住居址出土遺物

擾乱を考慮に入れても接合状況が離れた細片どおしが接合していることを考えると頭初より破片を投入したものと考えられる。これはいわゆる吹上パターンと呼ばれる住居址内への遺物廃棄パターンよりも土器溜り等に見られる廃棄パターンとの類似性が強いと考えられる。またこれとは別に炉址内、P<sub>1</sub>-1内の遺物出土状況も注目される。炉址内から出土した第21図-1の土



第23図 7号住居址出土遺物

遺物（第21～23図）

1～8、10～24は深鉢である。1、16、22は大型のもので、10、16～20はやや大型のものであり、6、23は小型の深鉢である。1はX字状把手付大型深鉢である。ハの字文を地文とし体部には渦巻文が低隆帯のみにより描出されている。ほぼ1/2が残存し、復原口径は46cmを測る。砂質の胎土である。3、6、8は隆帯による縦区割の見られるもので、この内3、8はこれに附随して沈線表現が採られている。18、19は同一個体で隆帯+沈線で渦巻文が施文されている。地文を見ていくと2、3、5、8、10、14、16が条線文で、この住居址出土遺物中蛇行沈線の施文される唯一のものである。ハの字文地文のものは1、4、6、17である。櫛歯状の工具による押し引き文が見られるのは7、15である。やはり同様の原体による刺突文が見られるのは11～13の同一個性である。なお、5はE-8区に位置する62号土壙出土遺物との接合関係が見られる。また、23、24は土器形式上他に比べ古い要素をもち、切り合い関係のある4号住居址からの混入と考えられる。

25～27は磨り石の断欠であり、全て住居址覆土上層から出土している。石材は全て安山岩製である。28は打製石斧の断欠である。29は黒曜石製の石鏃である。30は同じく黒曜石製の石匙である。

器の出土状況は大型破片を埋納したものと考えられる。これは炉址中央から炉底部より10cm浮いて表を上にして検出されている。これの上に礫やこの土器の細片、第21図-7の土器が投入されている。また第21図-1の同一個体の被片のP<sub>1</sub>-1上層からの出土状況も埋納されたものと考えられる。以上を整理すると住居址廃絶後一定期間をおいて炉址、P<sub>1</sub>-1に第21図-1の破片の埋納、礫の投入、これに引き続き覆土中への土器細片、礫等の投入、住居址埋没という経過がたどられるのである。

## 2) 土壙とその遺物

調査の段階で欠番としたものや、整理の過程で欠番としたものが多く、ここでは新たに土壙番号を振り直して記述を進める。なお紙面の都合上平面図は全て掲載したが一部記述を割愛する。土層注記中のCは炭化物粒子、Fは焼土粒子、Rはローム粒子を表し、各々の混入の見られたことを表している。また、図版中断面図のないものは磁北を上にレイアウトしてあり、その深さは一をつけてcmで表してある。

**1号土壙** H-1区に位置する。略方形のプランを呈し、長軸117cm、短軸115cmを測る。深さは38cmを測る。土壙中には人頭人の礫が投入されていた。遺物は出土していないがその形態及び礫の出土状況から中近世の土壙墓である可能性が考えられる。

**2号土壙** H-2区に位置する。長軸円形のプランを呈し、長軸130cm、短軸83cmを測る。深さは最深部で35cmを測る。主軸はN-5°-Eである。拳大～人頭大の礫が数個検出されている他遺物は出土していない。

**3号土壙** I-2区に位置する。長軸127cm、短軸113cmを測る橢円形プランを呈し、深さは40cmを測る。上層を1号溝址により削平されている。

**4号土壙** F-2区に位置する。直径65cm前後の略円形プランを呈し、深さは37cmを測る。覆土は黒褐色を呈し炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。貯蔵穴状の機能をもった土壙と推定される。

**5号土壙** H-2区に位置する。直径90cm前後を測る円形プランの土壙で深さは27cmを測る。覆土上層から深鉢（第29図-1、2）が出土している。これはその出土状況から頭初より破損したものが投入されたものと考えられる。第29図-1、2は同一個体である。これは頸部に横S字状文の施文の見られる類例の少ないもので、沈線施文後にヘラ状工具によるハの字状文が見られる。

**6号土壙** H-2区に位置する。直径129cm、短軸117cmを測る略円形プランの土壙である。深さは19cmを測る。遺物は出土していない。

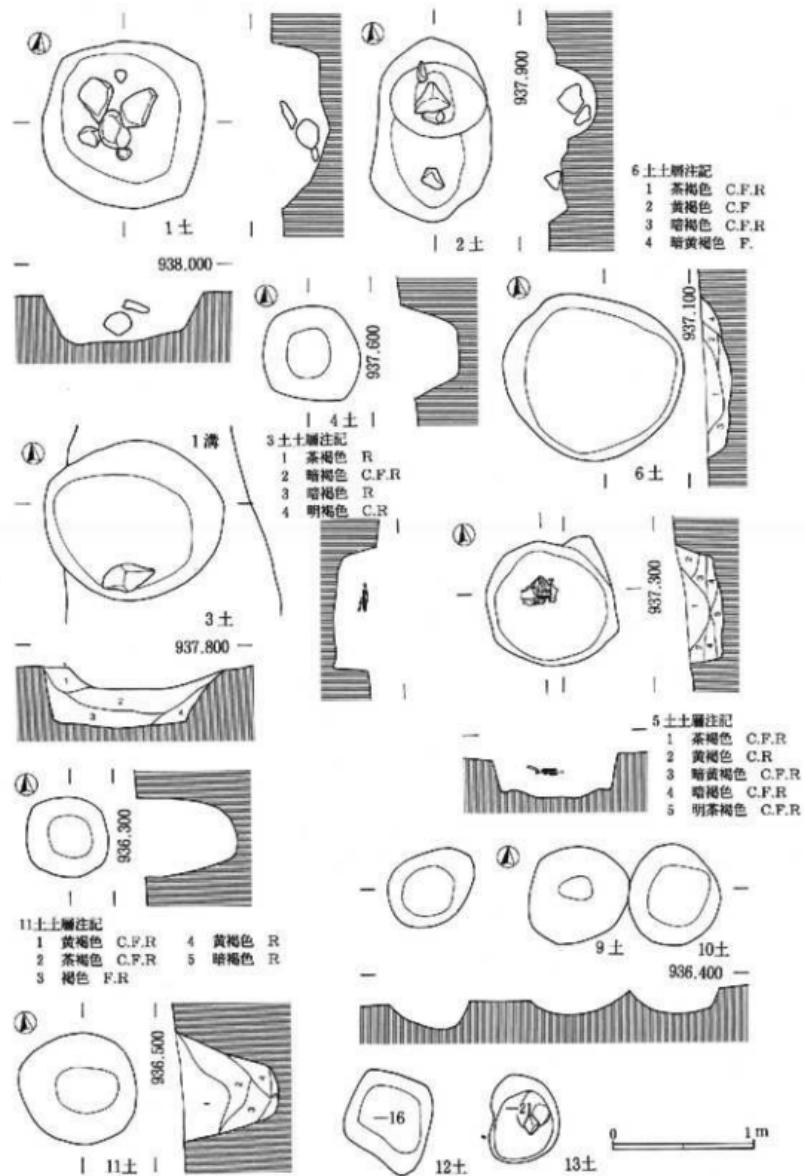
**7号土壙** F-3区に位置する。直径55cm前後の略円形プランの土壙で、深さは69cmを測る。覆土は暗褐色で炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。

**9号土壙** G-3区に位置する。東辺で10号土壙と接するが先後関係は不明である。直径70cm前後を測る略円形プランを呈し、深さは12cmと浅く、皿状の底部形状となる。覆土中から細片となって第29図-3が出土している。

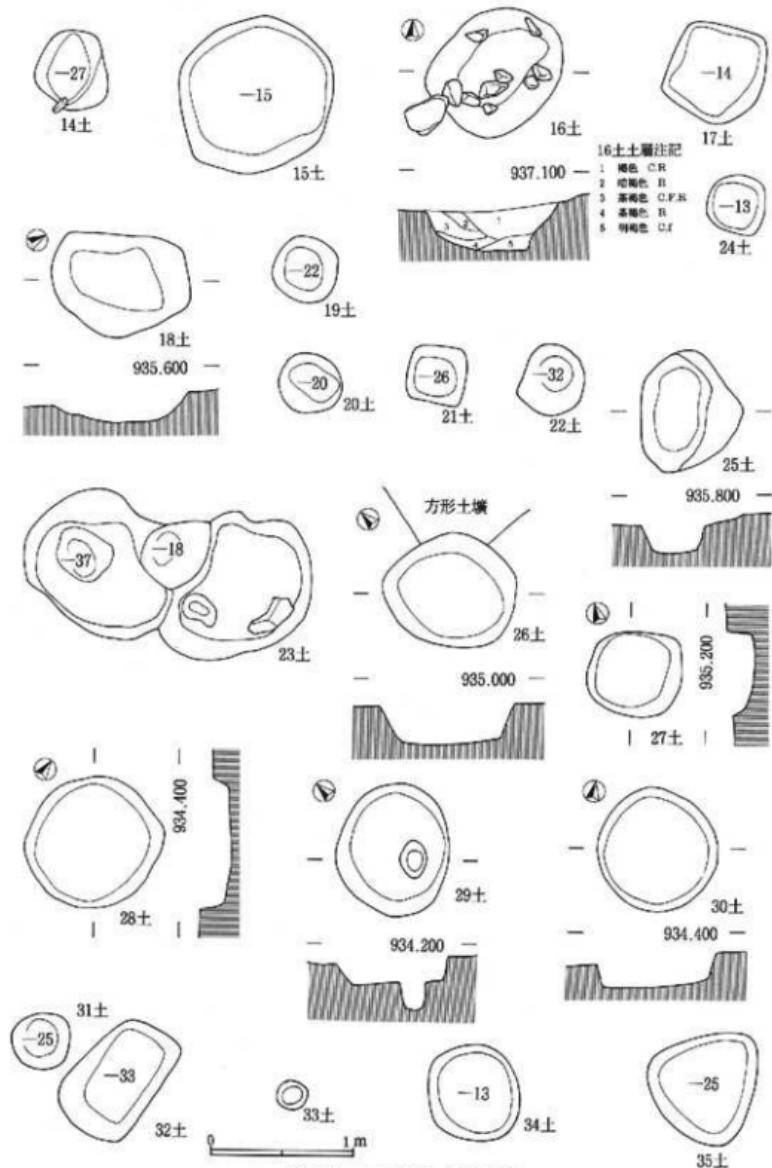
**10号土壙** G-3区に位置する。直径70cm前後を測る略円形プランの土壙で、深さは15cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を含む。遺物は第29図-6、7が出土している。

**11号土壙** G-3区に位置する。直径80cm前後を測る円形プランを呈し、深さは70cmを測る。覆土下層から第29図-12が出土している。

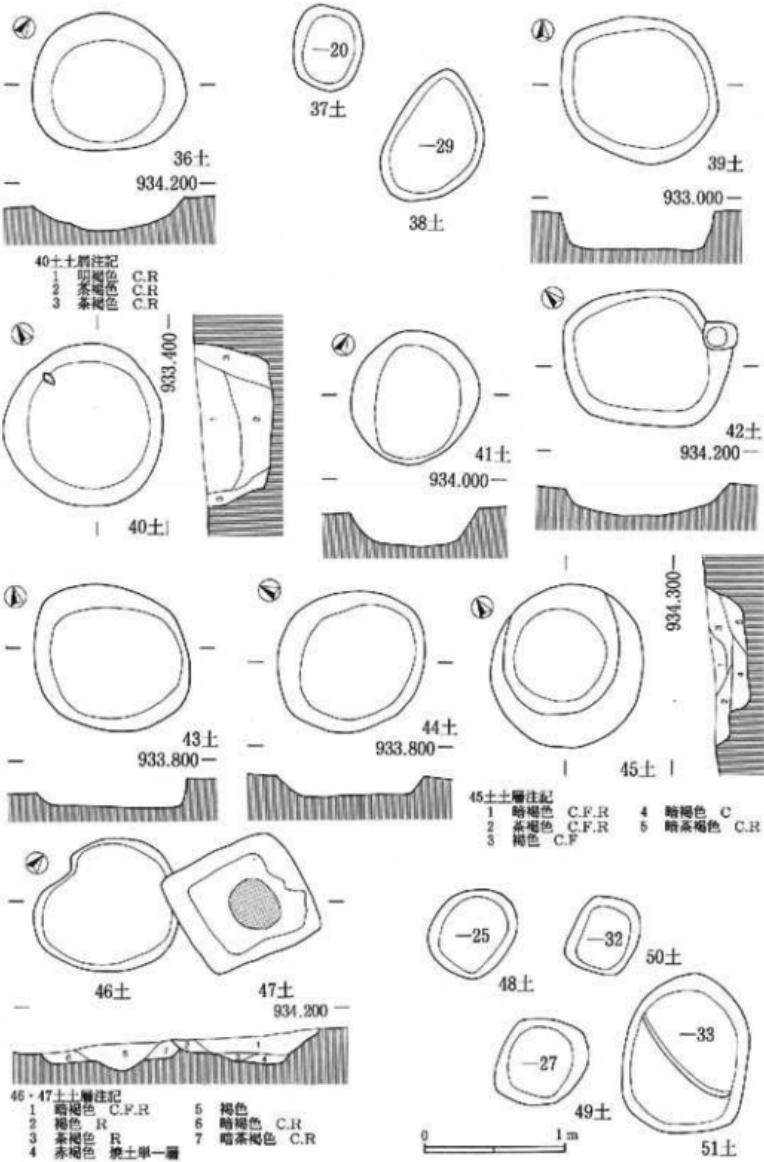
**15号土壙** H-3区に位置する。直径110cm前後を測る略円形プランの土壙である。覆土は黒褐



第24図 1号土壤～13土壤



第25図 14号土壤～35号土壤



第26図 36号土壤～51号土壤

色を呈し、炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。第29図-5が出土している。

**16号土壤** F-3区に位置する。上層を1号溝址に削平されている。長径97cm、短径80cmを測る楕円形プランを呈する土壤で深さは31cmを測る。覆土中から拳大の礫が数個まとめて出土している。

**18号土壤** F-3区に位置する。長軸97cm、短軸73cmを測るやや不整な長方形プランを呈し、深さは16cmを測る。覆土は暗褐色を呈し炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を含む。

**26号土壤** E-4区に位置する。長軸97cm、短軸82cmを測る楕円形プランを呈し、深さは27cmを測る。北東部の一部を方形土壤Jにより削平されている。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含む他ロームブロックが疎らに混入している。

**27号土壤** F-4区に位置する。一辺65cm前後の略方形プランを呈し、深さは19cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。

**28号土壤** E-5区に位置する。直径95cm前後を測る円形プランの土壤で、深さは17cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、炭化物粒子を少量含む。

**29号土壤** E-5区に位置する。長径95cm、短径82cmを測る楕円形プランの土壤で、土壤底部に直径20cm程の小ビットが穿たれている。深さは18cmを測り、底部施設は更に20cmの深さを有する。覆土は黒褐色を呈し、炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を含む。

**30号土壤** E-5区に位置する。直径85cm前後のほぼ円形のプランを呈し、深さは21cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含む。また、この覆土中から第29図-13の石鐵が出土している。これは黒曜石製で完存する。

**33号土壤** E-6区に位置する。試掘調査時に検出された上器埋設土壤であるが、耕作土直下から検出されたことから地主の春作を考慮してこの段階で遺物を取り上げた。遺存した土壤底部は直径20cm前後を測る円形プランで、覆土は暗褐色を呈する炭化物粒子を少量含んだものであった。埋設されていた土器は第29図-4で胴中位以上を耕作等により欠失している。これは隆帯+沈線によって縦区割された深鉢で区割後に綾杉状に条線を充填している。

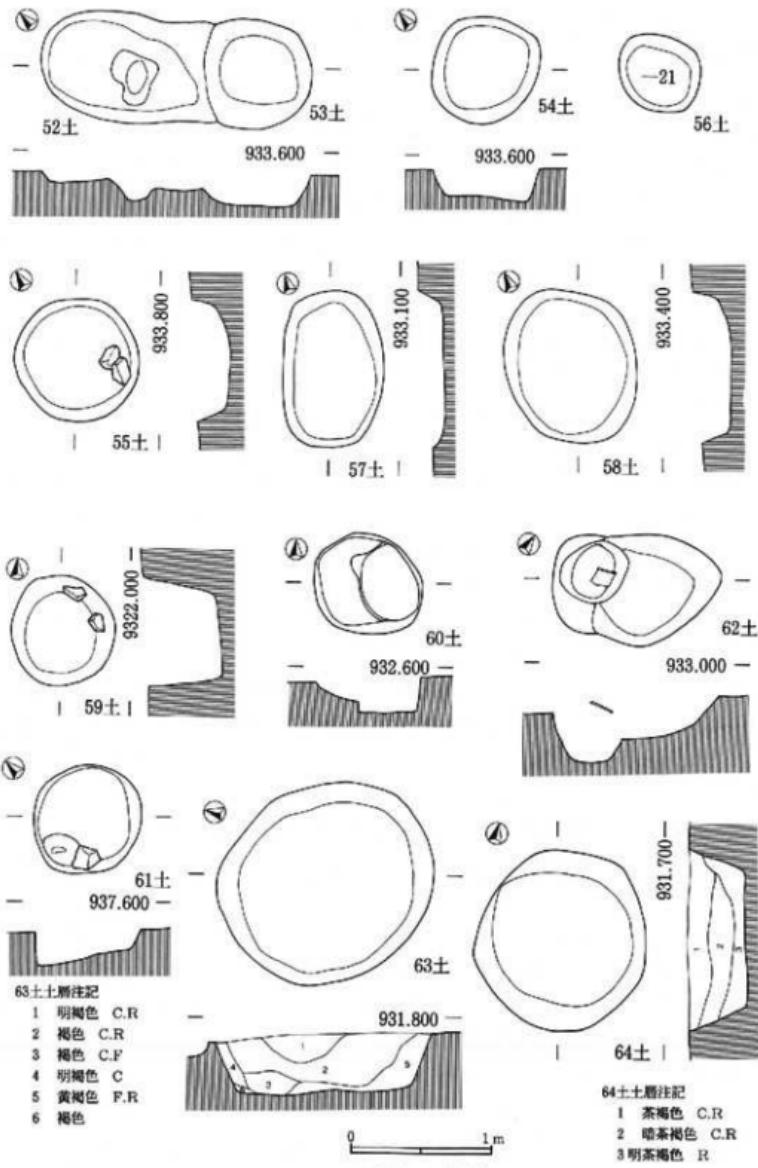
**36号土壤** F-6区に位置する。長径109cm、短径97cmを測る。深さ20cmを測る浅い皿状の底部形状となる。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。

**39号土壤** D-6区に位置する。直径105cm程度の略円形プランを呈する。深さは27cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を含む。

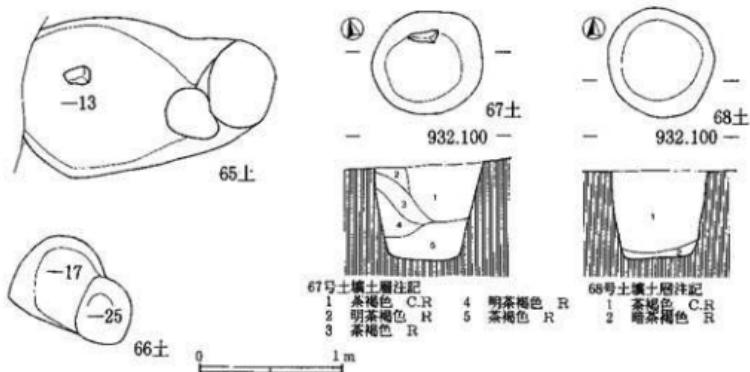
**40号土壤** E-6区に位置する。直径105cm程度の円形プランを呈し、深さは51cmを測る。土壤底部から石匙（第29図-11）が出土している。

**41号土壤** F-6区に位置する。直径90cm前後のほぼ円形のプランを呈する。深さは26cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を包含する。

**42号土壤** F-6区に位置する。長軸115cm、短軸95cmを測るやや不整な長方形プランを呈する。深さは21cmを測る。東辺に接して25cm×20cmの小ビットが穿たれている。覆土は暗褐色を呈し、



第27図 52号土壤～35号土壤



第28図 65号土壤～68号土壤

炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を包含する。

**45号土壤** F-6区に位置する。上面は直径110cm程度の円形プランを呈する。この土壤は南側を中心にテラスが設けられており、その深さは10cmを測る。また土壤上面から底部までの深さは26cmを測る。

**47号土壤** F-6区に位置し、西接する46号土壤を切り込んで構築されている。一边85~90cmを測る方形プランを呈する。深さは21cmを測る。この土壤の底部中央は被熱赤変しており、底部直上には焼土單一層の堆積が認められたことから住居址の炉址と想定して周囲を精査したが、柱穴となるようなピットは検出されなかった。単独の屋外の施設と考えたい。

**55号土壤** F-7に位置する。直径85cm程の円形プランを呈し、深さは22cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を少量含み、ローム粒子を含む。南側に小児頭大の礫が2個投入されていた。

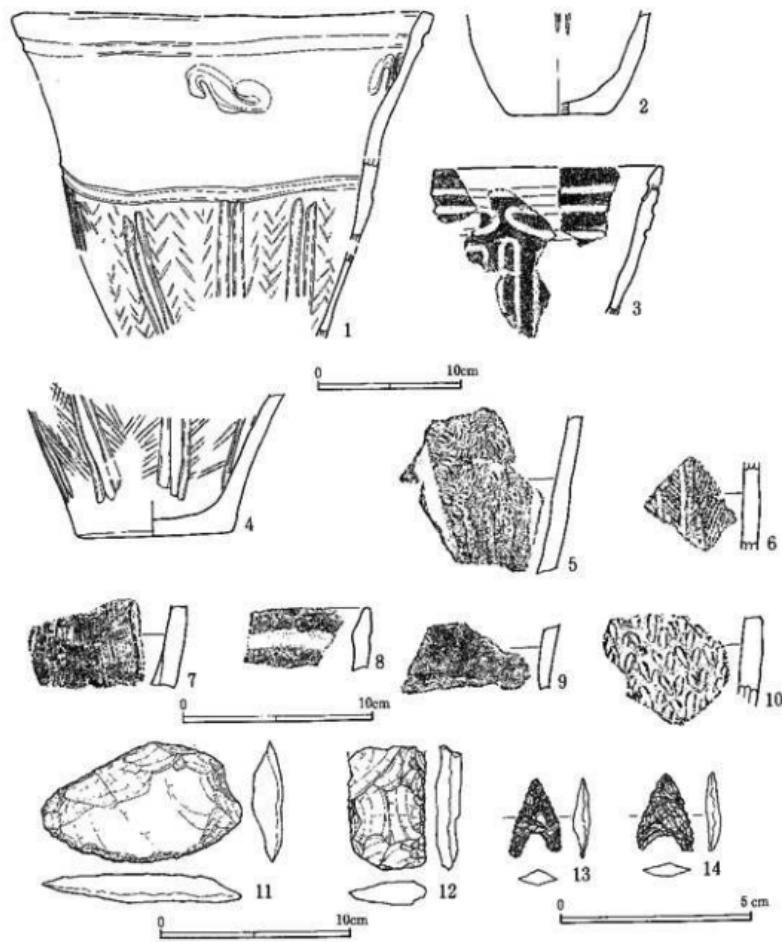
**57号土壤** E-7区に位置する。長軸111cm、短軸71cmを測る略長方形プランを呈する。深さは17cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を含む。

**59号土壤** D-8区に位置する。直径75cm前後の円形プランを呈する。深さは53cmを測る。覆土は暗褐色を呈し、炭化物粒子を含む。また、覆土中から第29図-14の石鐵が出土している。これは黒曜石製である。

**62号土壤** E-8区に位置する。長軸120cm、短軸80cmを測る不整形プランの土壤である。覆土上層から7号住居址-5(第21図)と同一個体片が出土し、これと接合している。

**63号土壤** C-8区に位置し、7号住居址と南辺で接し、北辺は5号住居址推定プランの中に切り込んでいるが、何れとも先後関係は前述したとおり不明である。覆土中から第29図-9が出土している。長径153cm、短径141cmを測る橢円形プランを呈する。

**64号土壤** C.D-8区に位置する。7号住居址のプラン中に構築されているが先後関係は不明な



第29図 土壤出土遺物（1～4は1/4、5～12は1/3、13、14は2/3）

点を残す。一応ここでは単独の土壤と考え、7号住居址に削平されたものと考える。直径125cm前後を測る円形プランの土壤である。

**67号土壤** D—8区に位置する。直径75cm前後の円形プランを呈する。深さは69cmを測る。覆土の中位に三角堆積が見られることから一定期間開口した状態だったことが窺える。

**68号土壤** E—8区に位置する。直径75cm前後の円形プランを呈する。深さは63cmを測る。覆土の観察から故意に埋め戻されたことが窺える。

### 3) その他の遺構と遺物

#### 特殊土壌 (第30図)

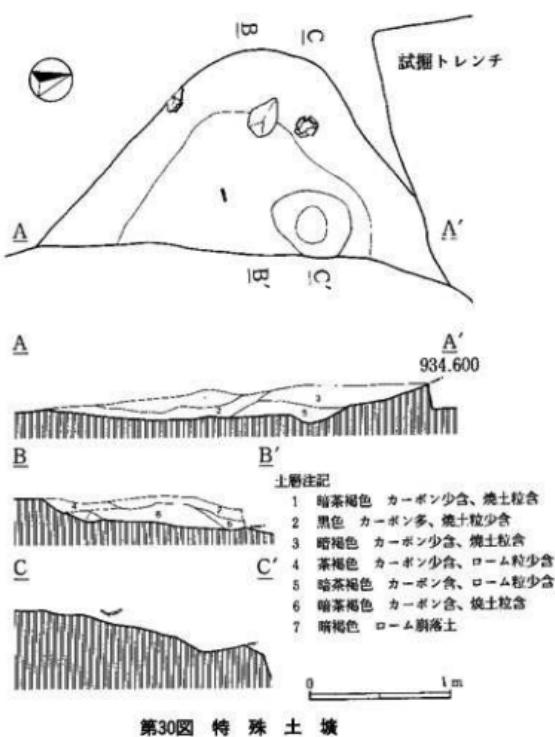
この土壌はH-6区に位置する。この形態、規模から貯藏穴のあるいは墓壙的性格をもつものとは一線を劃することは明確である。またその内容からも同様なことが言える。ここでは特殊土壌として他の土壌から分離して記述を進めることがある。

この土壌は水田の苦土直下から検出されている。西7mに2号住居址が、南西25mに3号住居址が所在する。土壌東半は旧田普請時に、北側の一部は試掘トレンチにより削平されている。

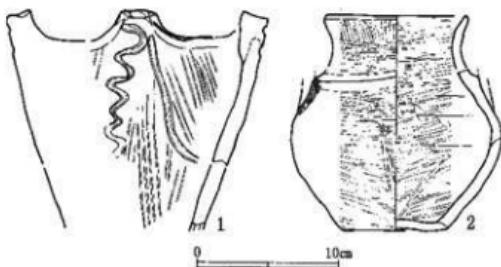
**形態** 上記の理由から不明な点を残すが略方形を想定しておく。

**規模** 同様に詳細は不明であるが、一辺2m以上で深さは現状で20cmを測る。底面 浅い皿状を呈し、全体に被熱し硬化している。また、土壌中央北寄りに57cm×47cmのピットが穿たれている。これの深さは8cmを測る。覆土 覆土中には多量に炭化物及び炭火物粒子、焼土粒子を含んでいた。

**遺物** (第31図) 1は深鉢の大型破片で覆土上層から出土している。突起は3ないし4単位見られる。棒状工具による蛇行沈線が見られる。2は覆土上層で検出された壺で底部完存、肩部 $\frac{1}{2}$ 、口縁部若干が残存する。割れ口を上にして確認面で検出されたことから元来完形、あるいは類完形であった可能性が大きい。また土器中には焼土が充填されていた。



第30図 特殊土壌



第31図 特殊土壌出土遺物

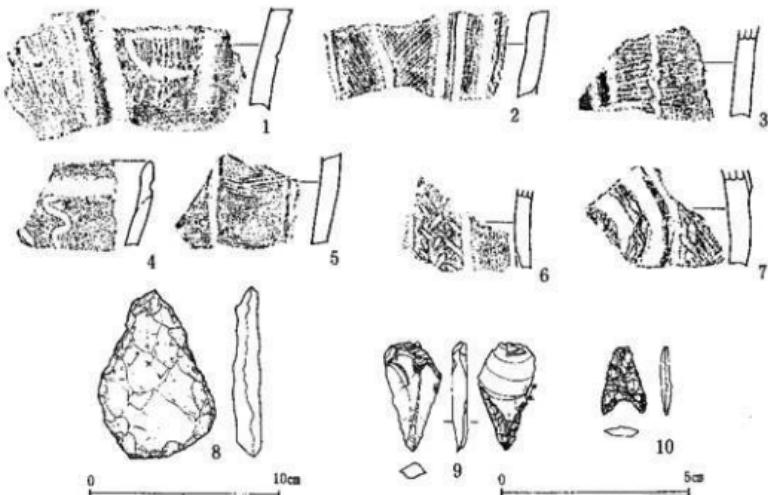
さてここで問題になるのがこの土壙の機能である。土壙底面が被熱し硬化していたことや、覆土中に焼土粒子、炭化物粒子が多量に含まれていたことから、火を用いた祭祀行為、あるいは生産活動の場として想定することが可能ではなかろうか。集落内での占地を見ると環状の居住域の更に外縁に位置する。そして当時から湿地、氾濫原と考えらる谷部に臨接している。西側の谷部と居住域との比高は2~3mあるのに対し、東側の谷との比高は特にこの部分で1mとない。当時から水害の危険が大きかったと考えられる。即ち、祭祀を行った遺構とした場合この水害から免れる為の祭祀行為を想定することが可能ではなかろうか。また、火を用いた生産遺構とした場合、土器焼きの遺構として想定される。この場合底面の赤変が見られないことからその使用期間は短かったものと思われる。また覆土観察から一層土壙内から炭化物等を全て掻き出した後の自然堆積によって埋設したと思われる。この埋設の過程で2の土器等が投入されたことは、いわゆる送りと呼ばれる儀礼的な行為が存在した可能性も考慮される。そしてこの場合の占地の評価としては通常集落の中央で行われる行為を水際で行ったことにより火災等の履歴の危険を避けたものと位置付けられる。未だ該期の資料がほとんどなく決定的なことは言えないが一応後者を探り、この特殊土壙の機能を位置付けておく。

#### 1、2号溝址、方形土壙A~L

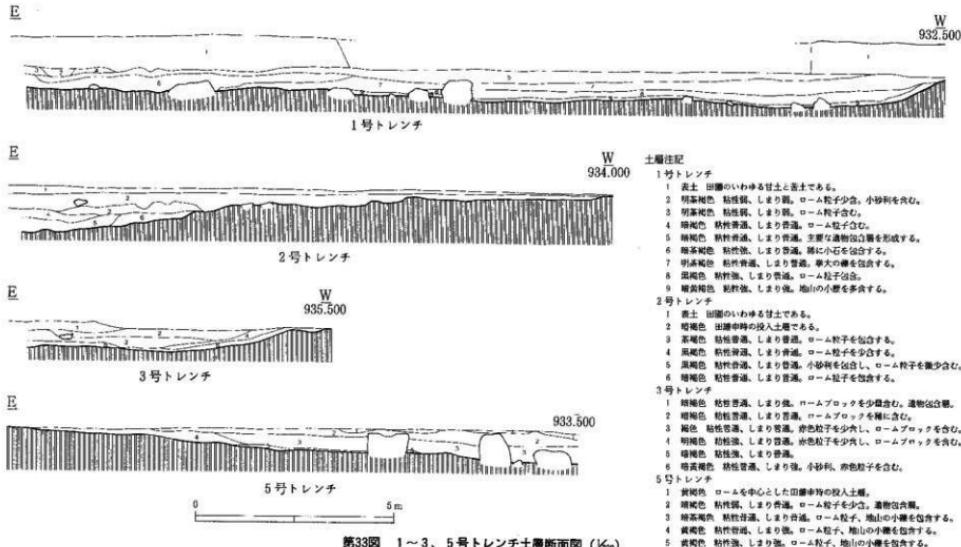
これらは全て現代の所産であり、その詳細については紙面の都合等から割愛する。

#### 4) 遺構外出土遺物

ここでは尾根部出土のものを取り上げておいた。方形土壙内、1、2号溝址出土のものも含む。



第32図 遺構外出土遺物



第33図 1～3、5号トレンチ土層断面図 (JGS)

## ii 谷部の調査

谷部の調査は圃場整備の盛り土の関係や時間的な制約から必ずしも十分行えたとは言い難く、包含層の広がりやその性格を論ずる上で少なからず問題を残すことになった。また調査地点の選定にしても試掘調査の成果を十分に活かしきれていなかった。反省点として挙げておく。

さて、谷部の遺物包含層は上記の制約はあるが以下の二つに分けることができる。即ち調査区南部のF、G、H-9区を中心に展開する南土器層、H-6区中心に展開する東包含層、希薄ではあるが調査区西側に展開する西包含層である。ここに提示できた資料はほとんど南土器層出土のもので、他からの出土は極く少量でしかない。ここでは石器は全谷部出土のものをまとめて提示するが、上器については一応各包含層毎に提示していくこととする。

### 南土器層

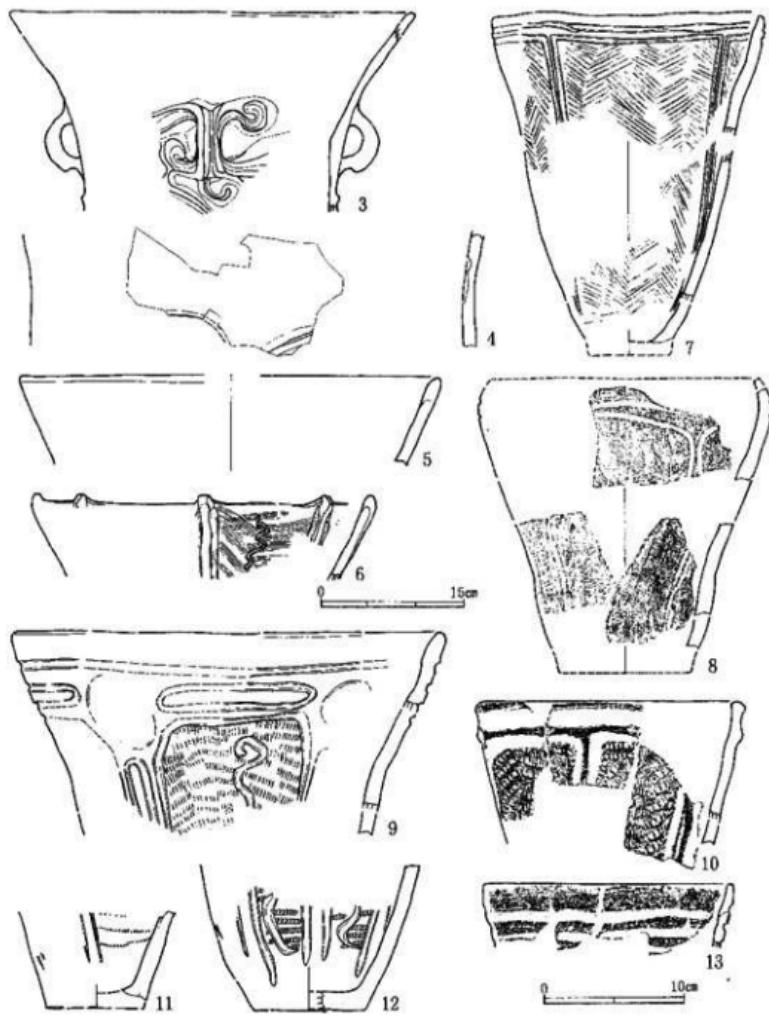
F、G、H-9区を中心に展開している。遺物の広がりは調査対象区域から外れてしまったがF、G、H-10区に相当する部分にまで達していたことはこの部分のT字中に採集した遺物から明らかである。

この土器層は表土工作土層直下で検出されており、その機能喪失以後どの様な埋没過程を辿ったか明らかではない。また、その形成過程も非常に短い時間幅の遺物が同一土層中に包含されているだけのものであり、他は全くの無遺物層であることから谷部の形成過程は不明な点を残すが、包含層の形成過程はその出土遺物から大和田遺跡の集落の成立にやや遅れて本格的に形成されたものと判断される。一部前期の遺物も含まれている（第34図）が、尾根部には、該期に構築されたと明確になった遺構は存在しない。尾根部の表土流出が顕著なことを考えると何らかの遺構が存在した可能性は否定できないが、これらは縄文中期後葉の遺物と同一層中から検出されており、量的にもとてもこの時期に積極的な廃棄行為が行われたものとは判断できない。縄文中期後葉の段階でこの時期の遺物と同時に廃棄されたものと考えたい。また、この包含層は集落の廃絶と軌を一にしてその機能を喪失している。

遺物の出土状況で注目されるのは全て破片で検出されていることであり、上器復原に際しても完形あるいは類完形個体となるものは全く存在しない。また、明確なブロックとしては把握されなかつたが、同一個体と判断される土器片がある程度空間的に集中している例も存在する。なおこれらの遺物の集中にはある程度のレベル差があることは注目される。それは廃棄された状態を比較的良好に遺存するものと判断されるからである。また、これらの遺物の集中は単一の個体の集中ではなく複数の個体の破片が見られ、接合関係も多様な様相をしめしている。今回細かな点での分析はできなかつたが、今後廃棄の場の遺物の集中を分析することにより廃棄の意味・性格、更に人間の行動の復原を也可能にするものと思われる。

また、取り上げは不可能であったが獸骨状の有機物が出上し 第34図 谷部出土器(1)





第35図 谷部出土土器(2)

ている。その他自然遺物については時間的、予算的制約から明らかにできなかった。

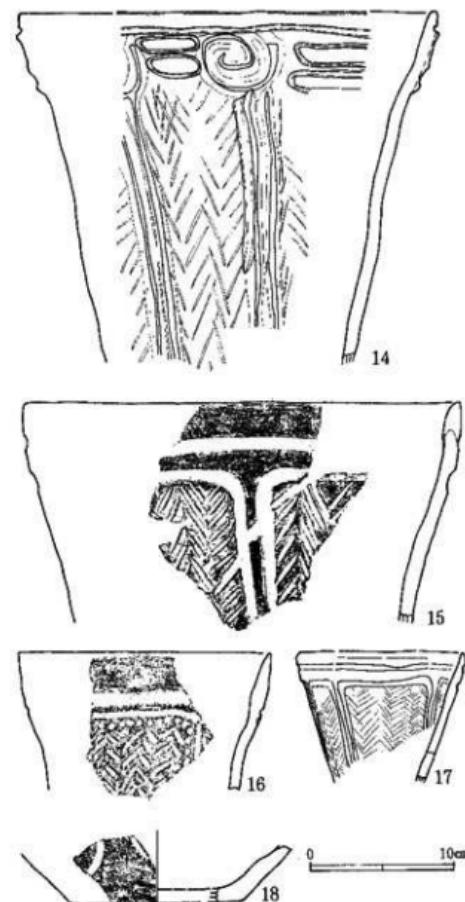
#### 遺物（第34～40図）

第34図に提示したものは縄文前期に属するものである。共にローリングは受けておらず中期後葉の遺物に混じて検出されている。

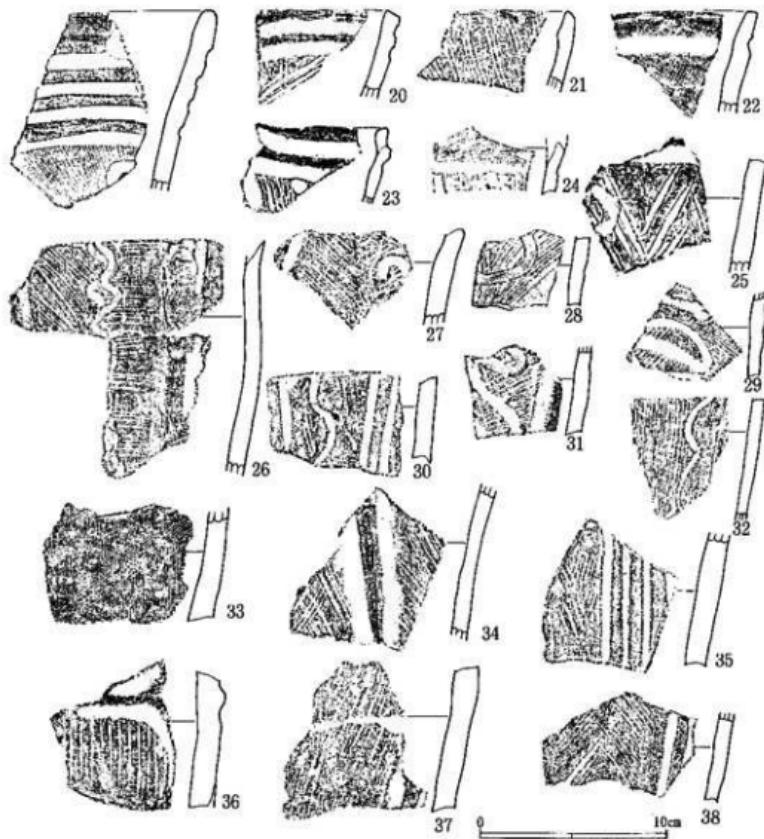
第35、36図は全て復原実測したもので、その遺存率は未接合破片を含めて $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{2}$ 程度のものばかりである。

3~5はX字状把手付大型深鉢である。文様は隆帯、隆帯+沈線により描出される。また口縁部内面の肥厚は輪積痕に僅かに痕跡をとどめる。6はいわゆるバケツ状の形態となる深鉢である。条線文施文後に蛇行沈線を施文する。7は接合しない同一個体の破片から復原実測したものだが下半部が二次焼成の為器形にやや歪みを生じている。本来は直線的に立上るものと考えられる。9は地文に刺突文をもつもので蛇行沈線が施文されている。10は隆帯+沈線により区割されるものである。蛇行沈線は施文されない。14は隆帯による渦巻文貼付け後隆帯貼付けによる縦区割が施文される。これに伴い一部指ナデにより沈線が施文される。この後口縁下の沈線が施文される。16は沈線による懸垂文区割の内側に棒状工具による刺突が見られる。

第37図は地文に条線文の施文されるものである。多くのものに蛇行沈線が施文されている。また隆帯貼付けによる区割の見られるものは20、23、26、34、36であり沈線区割のものとそれほど比率的に偏りはない。第38図に提示したのは地文にハの字文の見られるものである。蛇行沈線の施文される例は皆無である。またここに提示した隆帯貼付けの見られるものは44、45、51~53とやや少ないがまだ一般的に見られると判断される。なお53の上器は東包含層出土の第41図10の土器と同一個体である。第39図54~64は地文に縄文の施文されたものである。この内54は加曾利E3式、55は加曾利E4式の搬入品と考えられる。54の縄文原体はR<sub>左</sub><sup>右</sup>である。蛇行沈線の施文されるものとして63、64が提示されたのみであるが図化できないもので蛇行沈線の施文さ



第36図 谷部出土土器(3)

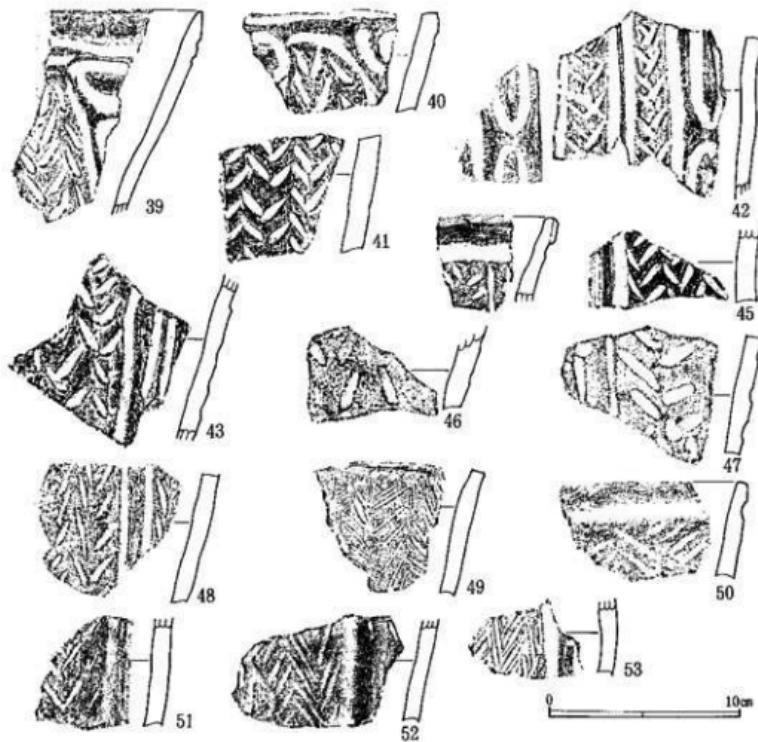


第37図 谷部出土土器(4)

れたものが比較的多かった。また陸帯の貼付は54、55の搬入品以外は見られなかった。第39図65、67は地文に押し引き文の見られるものである。65には蛇行沈線が見られる。本遺跡全体を見てもこの地文の施文される例は極端に少ない傾向が窺える。第39図66、68~72は刺突文を地文とするものである。これらの内66、68、69は陸帯の貼付けが見られ、この地文をもつものに陸帯貼付けの多い傾向が窺える。第40図84は地文に櫛齒状工具による沈線文の施文されるもので、沈線区割が見られる。この地文の施文は本遺跡中唯一のものである。

第40図86、87は鉢である。88は広口壺のII縁部片である。

以上この土器通りから出土した土器は後述する集落の新相を示す住居址に共伴する遺物と同時期性を示すものを主体的に出土し古相を示すものは客体的存在となっている。



第38図 谷部出土土器(5)

#### 東包含層

この包含層の広がりは周囲で遺物が検出されていないことからH-6区を中心としこれを大きく逸脱するとは考えられない。またこの包含層の形成は南土器窪りと同様にこの集落の形成とほぼ同時に細々と開始され、集落の廃絶と一緒に終了している。

遺物の出土状況は全て細片となって出土しており、全体から散漫に出土している。また、南土器窪りの様なブロック的な集中は認められなかった。その遺物総量は南土器窪りに比べ遥かにすくない。この様な状況ではあるがその広がりが限定されたものであること、地形的占地を考慮すると規模は小さいながら場を意識した積極的な廃棄活動が行われたものと評価したい。

#### 遺物（第41図）

提示できた資料は12の鉢以外全て深鉢である。蛇行沈線が見られるものとして3、6、7、9が挙げられ、降帯の貼付の見られるものとして1、5、6、9、10が挙げられる。また、1、2、9は地文に細条線が見られる。なお10は唐草文系の土器である。



第39圖 谷部出土土器(6)

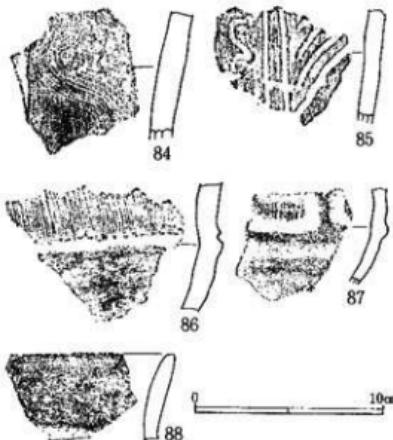
### 西包含層

この包含層の広がりは今回の調査及び試掘調査の結果から調査区よりも更に西側にまで展開していたことが想定される。

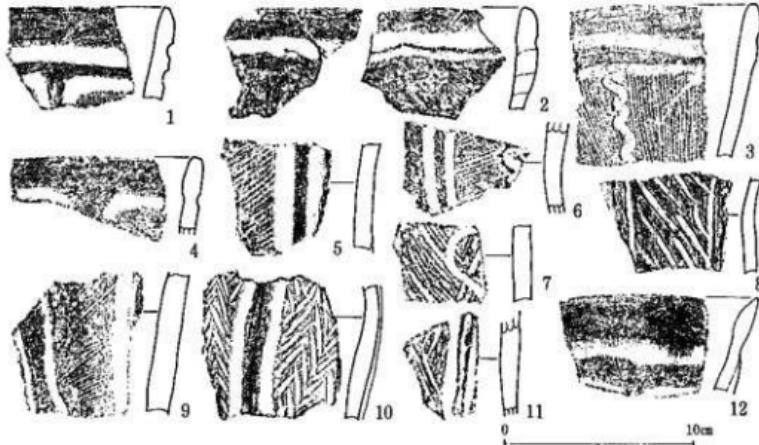
遺物の出土状況を見ると細片となっての出土で、ブロック的集中も見られない等東包含層との類似点が挙げられるが、この包含層を何よりも特徴づける属性として第1点として極めて広い範囲にまで包含層が展開していること、第2点として遺物の包含が稀薄であることが挙げられる。また、占地を見ると集落の居住域の展開する尾根の西側斜面の下部に位置している。このことは南土器溝り、東包含層との立地上の大きな違いである。このことは上記二者が人為的な行為を伴わずに形成され得なかったのに対し、この西包含層は必ずしも人為的行為が介在しなくとも形成され得る可能性を指摘できる。この様な占地とその広がり、遺物の稀薄さを考えた時、集落に於ける場の意識の欠落、人為的行為の欠落、即ち自然的、地理的条件によって偶発的に形成された包含層と位置付けることが可能である。

### 遺物（第42図）

図化し得たのは第42図の4点だけである。また、4は後・晩期の所産であろうか。



第40図 谷部出土土器(7)



第41図 谷部出土土器(8)

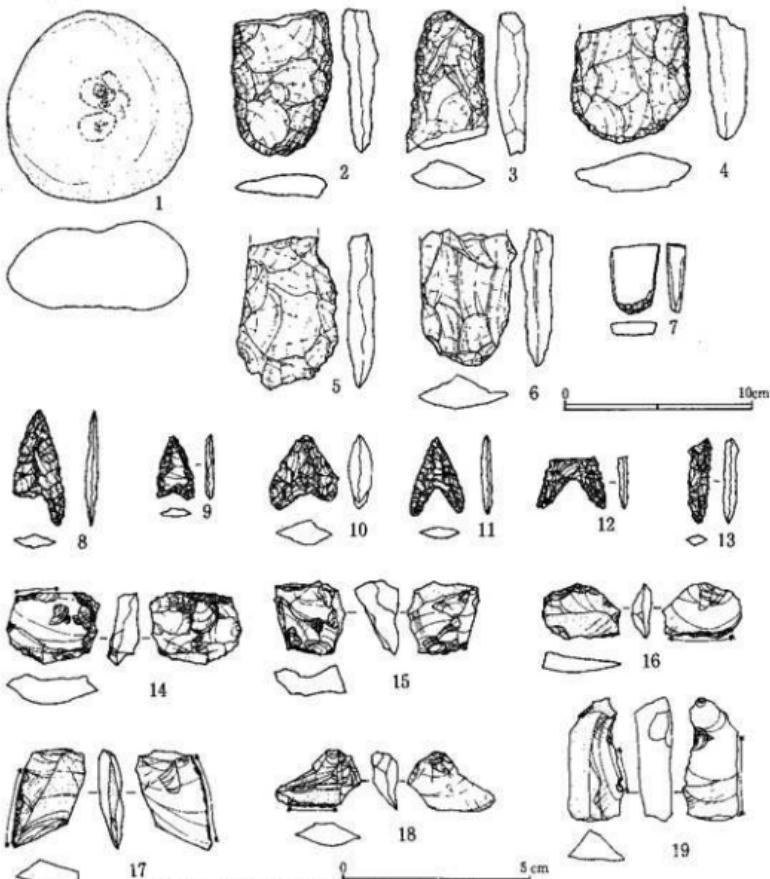


第42図 谷部出土土器(9)

#### 谷部出土の石器（第43図）

出土位置を明らかにすると 2、7、11、12、19が東包含層から、18が西包含層から、他は全て南上器層から出土している。

8～19は全て黒曜石製である。8～12は石鎌であり、8、12は一部欠損している。13は石錐の断欠である。14、15は楔形石器である。16～19は使用痕のある剥片で、この内19は擦痕が認められる。



第43図 谷部出土石器

### 3 まとめ

以上大和田遺跡から発見された遺構と遺物について見てきたが、ここでこれらが集落の中でどの様に展開しているか見ることとする。

大和田遺跡の所在する複数尾根はその尾根筋を挟んで東側斜面は狭く、割り合いフラットな斜面となっており、また氾濫原と考えられる冲積面との比高がほとんどないに対し、西側斜面は広い緩斜面となっており、沖積面との比高は2m近い数値をとる。この様な地形的制約から住居址や土壙はほとんどの西側斜面に展開している。

今回調査された住居址は7軒である（調査区域外にまだ数軒所在する可能性は否定できないが、今回の調査の成果を覆すものとは考えられない）が、これらは環状集落を構成する。この居住域の外縁の谷部には廃棄の場としての南土器溜り、東包含層が位置している。また東包含層と居住域の中間に土器焼き遺構と思われる特殊子壙が位置する。他の上壙については全て居住域の内側に位置している。

さて、ここで問題となるのが土壙の性格である。これに触れる以前に土壙について気付いた点を挙げると、凡そ三つにグループ分けができる。即ち直径90~120cm前後を測る円形プランの大型のもの、直径70~80cm前後を測る円形プランのもの、及びそれ以外のものの三者である。（第3者については今後細かく分析することによりその細分及びその位置付けが可能となるがここではそこまではできなかった）第一者、第二者は形態的に近似し、規模の上だけの違いが目に付くが、その覆土を見ると第一者が暗褐色系のものが多く、第二者は黒褐色系のものが目立つ。具体的には第一者として3、5、6、15、16、28、39、40、43、44、63、64の各土壙が、第二者として4、55、59、67、68の各土壙が該当する。これらの集落内での展開を見ると第一者は斜面下半及び斜面上端部に位置する。これに対し、第二者は住居址の展開する集落の外縁に位置し、住居址と比較的近い位置に存在している。この様な属性から第二者は各住居址と強く結びついた貯蔵穴としての機能を想定したい。第一者についてはこの類形に入る5号土壙の遺物出土状況等から一応墓壙的なものと想定しておく。

また、住居址の変遷を見ると土器形式等（土器については後述）によって大きく2時期に分類される。即ち1期として4、5、6号住居址（5号住居址については時期を特定できる遺物はないが炉址の形態、柱穴配置から類推してこの時期に置いた）、2期として1、2、3、7号住居址に分類される。これから集落内での占地を見ると1期の段階で尾根の南端に小さく纏っていたのに対し、2期になるとこの尾根の西側斜面いっぱいに集落が展開する様になったことが明瞭である。即ち1期の集落は他に生活の拠点もしくは母集団が存在したことを窺せるのに対し、2期の集落はここに生活の基盤を置き、もしくは拠点を置いた集団が居住したことを想起させる。

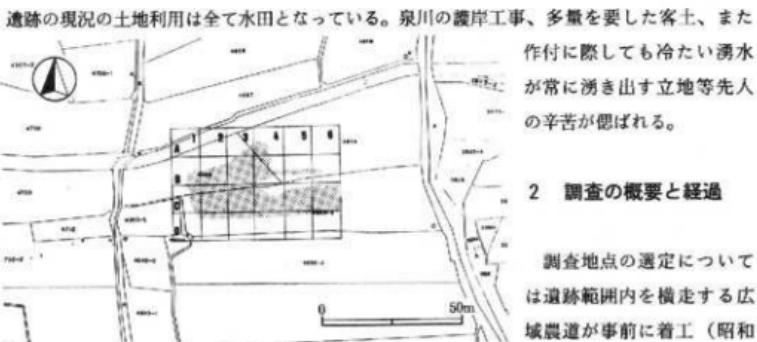
以上集落の空間構成・住居址の変遷について簡単に纏めた。その性格については後述する。

### III 大和田第2遺跡

#### 1 遺跡の概観

大和田第2遺跡は標高948～950mを測る沖積層中に形成された興文中期未葉の遺物包藏地である。遺跡は現在の泉川と近距離にあり、その位置関係からこの川の旧河道もしくは氾濫原であったことが想定される。

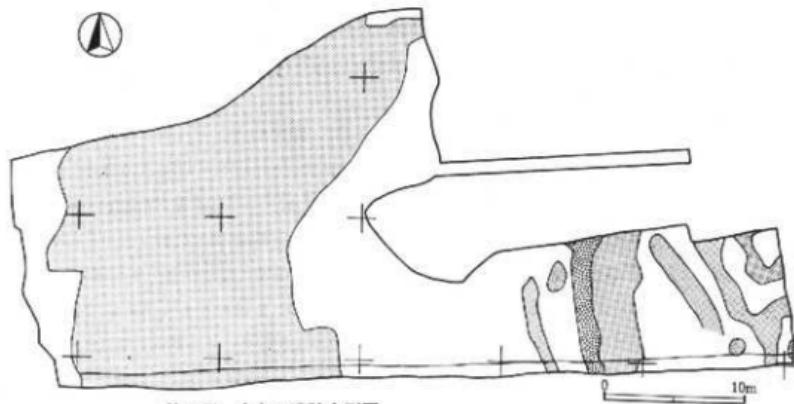
周囲が全て水田という事情もあるが他の遺跡の分布は全体に散漫である。周辺の遺跡として南西300mに大和田遺跡、北西100mに大和田第3遺跡が所在する。



第44図 大和田第2遺跡グリッド配置図

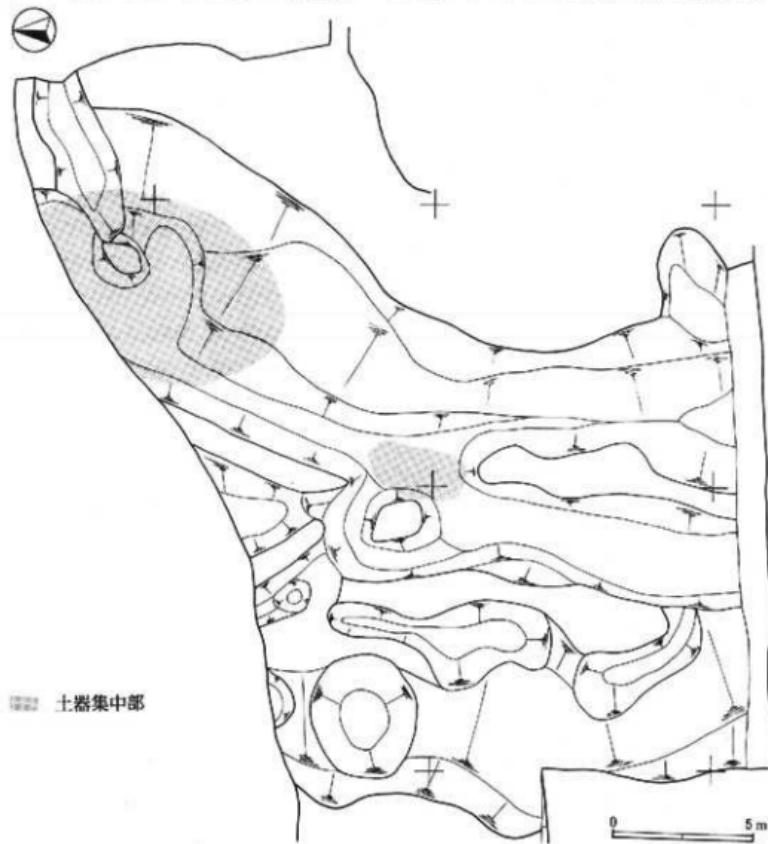
#### 2 調査の概要と経過

調査地点の選定について  
は遺跡範囲内を横走する広域農道が事前に着工（昭和62年10月、山梨県埋蔵文化

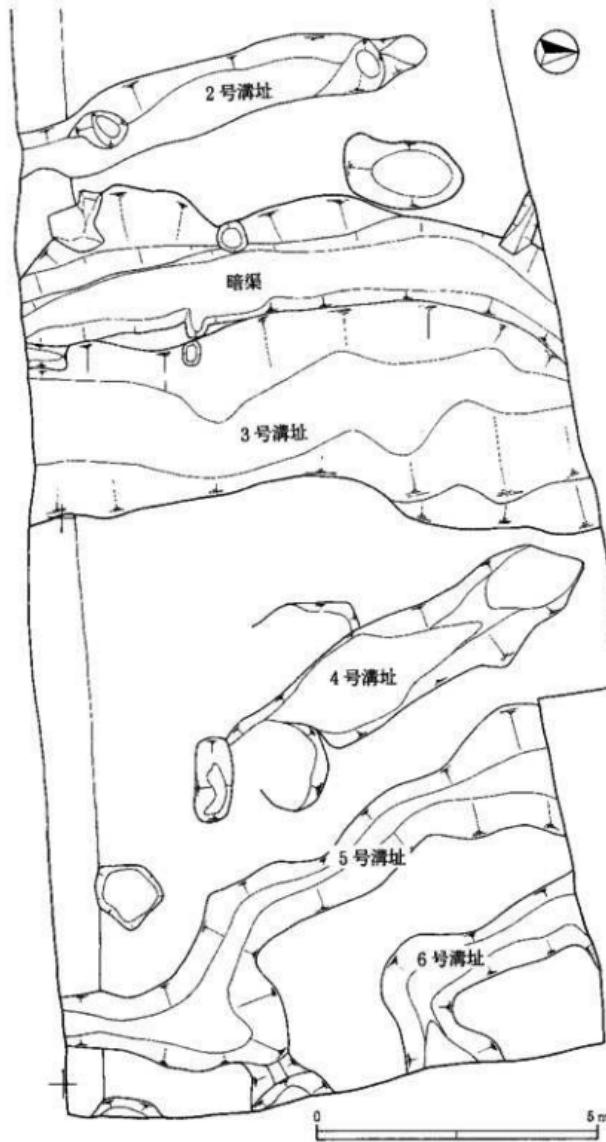


財センターによって試掘調査されたが遺物はほとんど採集されず、昭和62年12月に工事着工)している他、生活道路としての現在の道路の確保、また調査地点の南側の圃場整備工事除外地への配慮等から大幅に規制を受けたものとなった。この為面的調査を地番4850-3、4854、4855の圃場部分に限定し、他は必要に応じてトレンチ等により調査を進めることとした。またグリッドの設定は面的調査を行う部分の北西部の任意の一点に基準杭を設定し、北～南にA～D、西～東へ1～7の磁北に沿った10mグリッドを設定した。ベンチマークは調査区内の巨石に仮ベンチマークを置き、後に道路上のポイントから起算した。

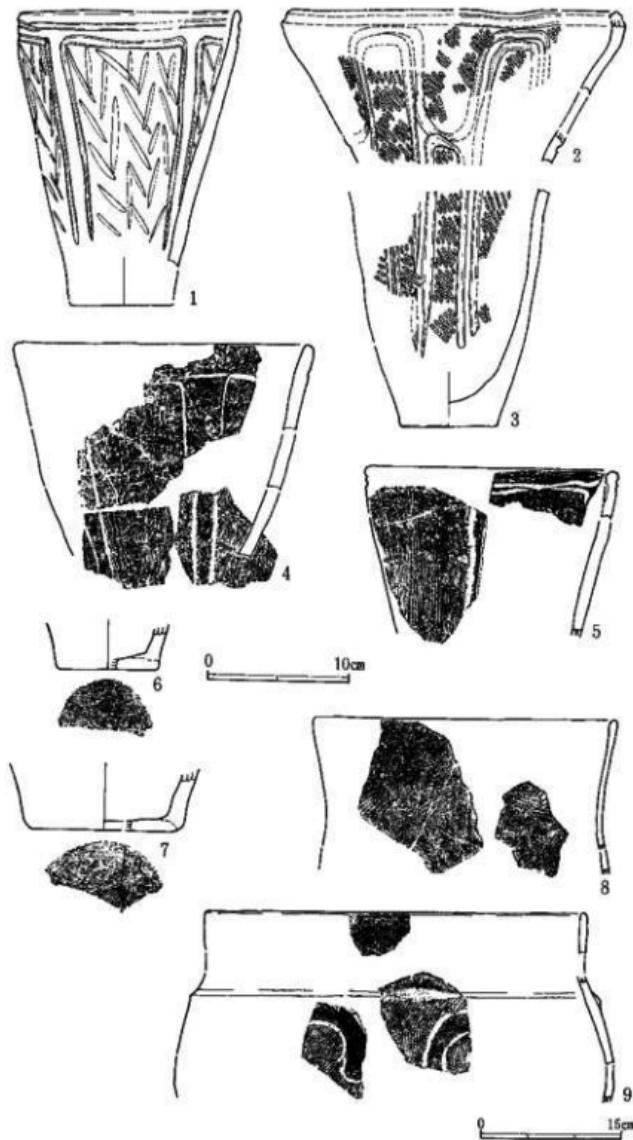
発掘調査は昭和63年5月26日に開始したが、長びく梅雨空の為作業は遅れに遅れた。また、多量の湧水と多量の礫の出土から作業自体かなり困難なものであった。途中時間的な制約もあ



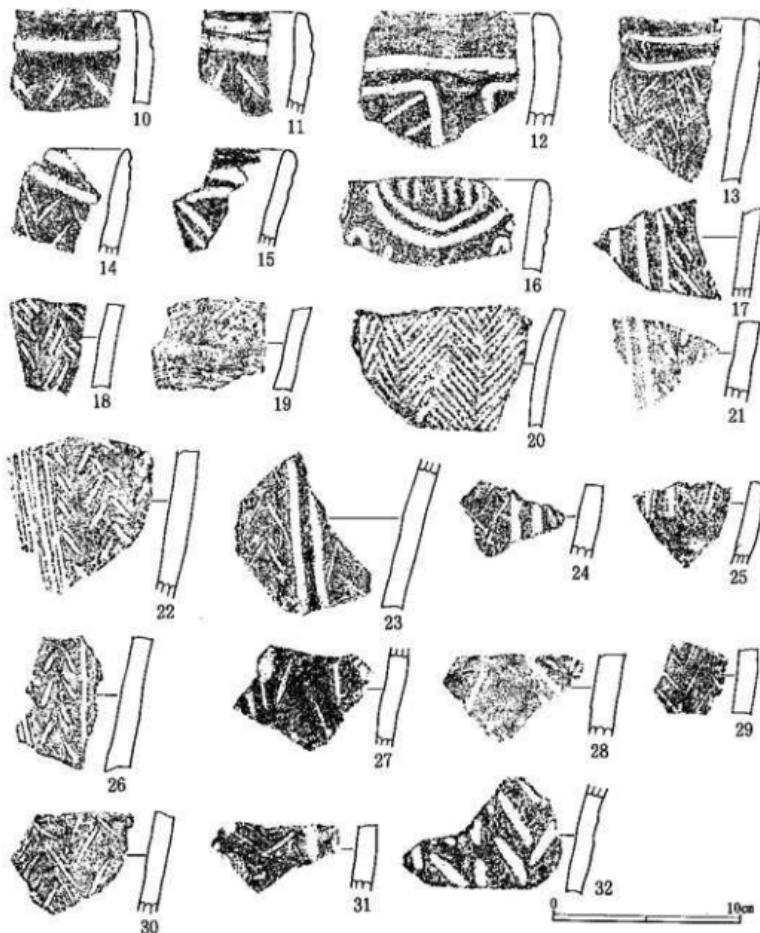
第46図 1号清址



第47圖 2~6號溝址

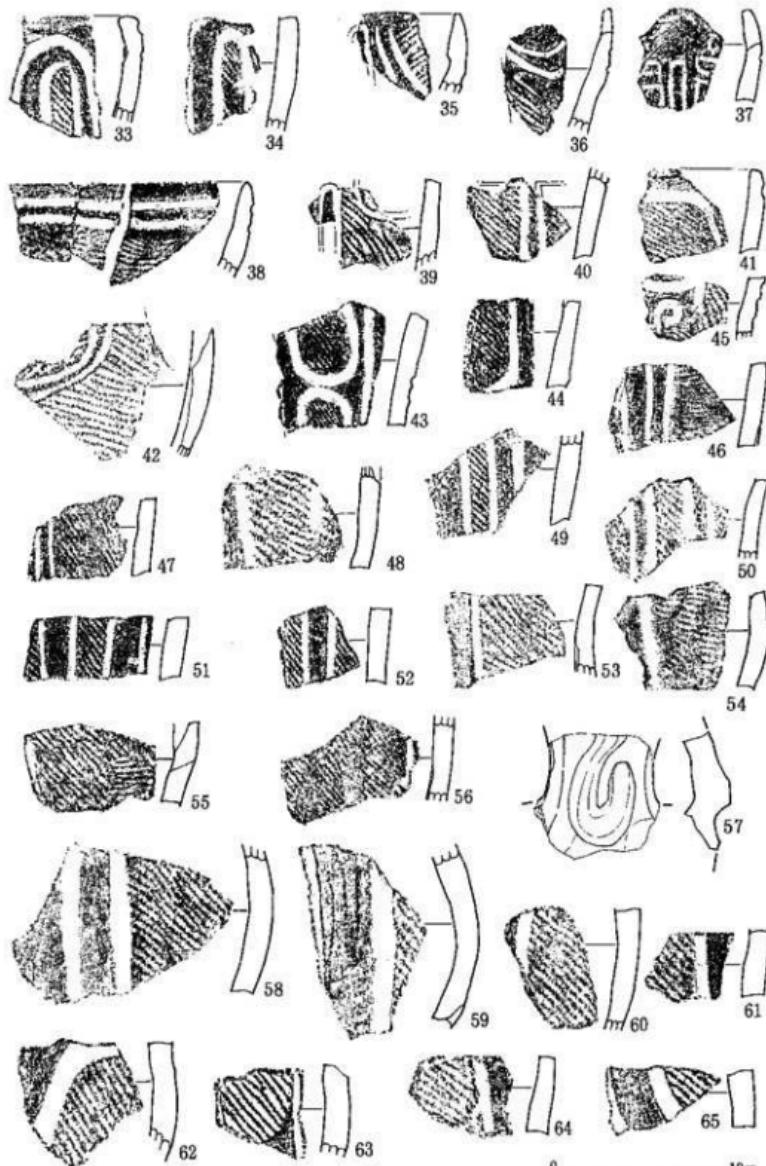


第48図 土器(1)

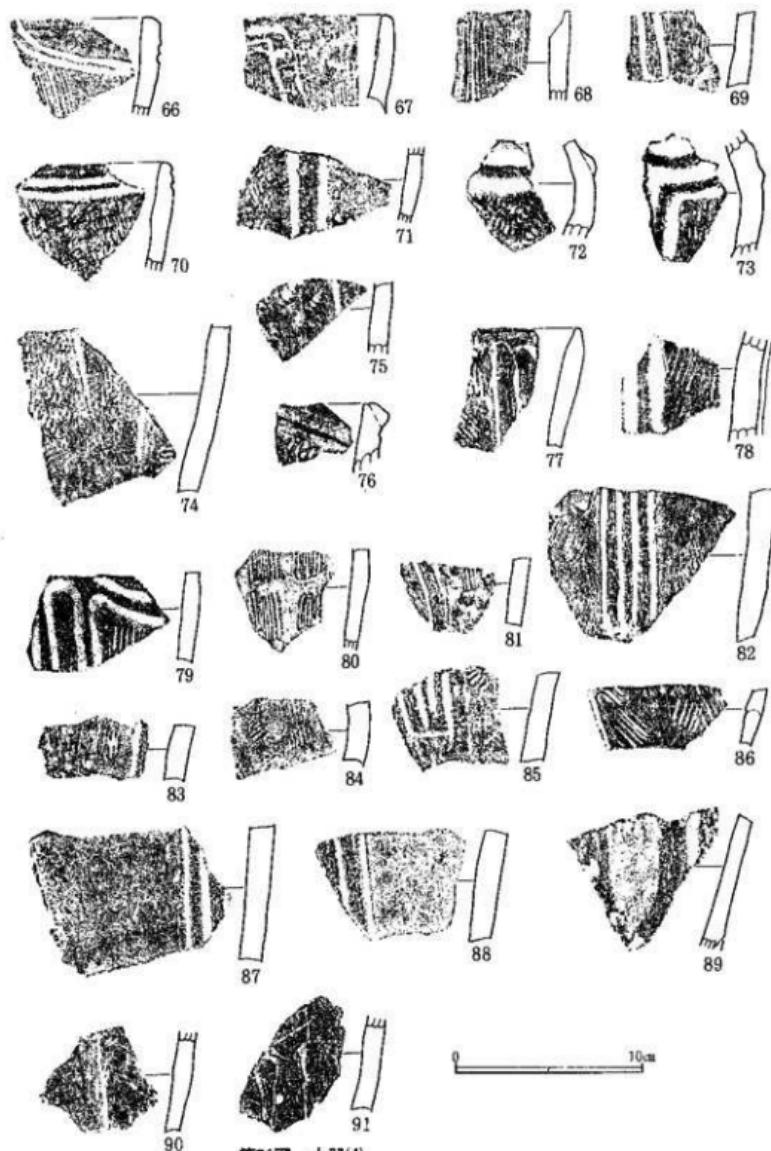


第49図 土器(2)

り一部大和田遺跡の調査と併行して調査を行い、最終的に土壌のサンプリングを行い調査を終了したのは9月7日であった。その後9月13日に長坂警察署長宛に埋蔵物発見届を提出し、整理作業は大和田遺跡調査終了後に着手し、平成1年3月31日に終了した。



第50図 土器(3)



第61図 土器(4)

### 3 調査の結果

#### 1 層序

前述した様な立地からその十層堆積は地点によって大きく異なることからここではその大要を示す。

最下層に位置するのは小砂利を含んだ黄褐色土である。粘性は極めて強い。中位には拳人の躰～巨石を多量に包含する黒褐色土層が堆積している。これは浸食による露出ではなく、鉄包水等の巨人な力によって上流から運ばれて来たことが明らかである。この土層の上位に小砂利を多量に含んだ黒色土層が堆積している。しまり、粘性共に弱い土層である。またこれらの土層の中に砂層や砂利層が見られ複雑な堆積を示している。

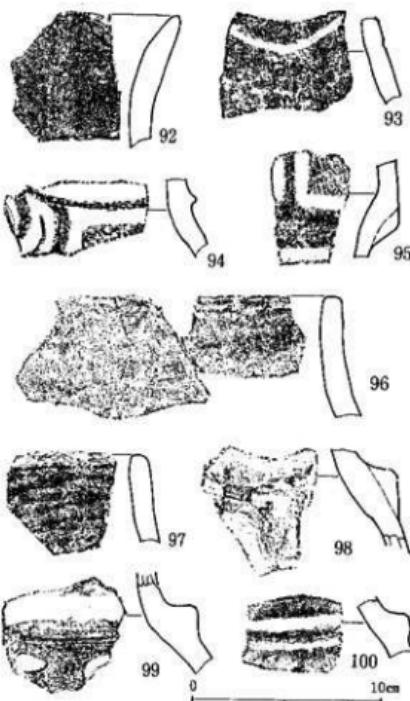
#### 2 遺構

ここでいう遺構は人間によって構築されたものではなく、自然の水流によって形成されたものである。

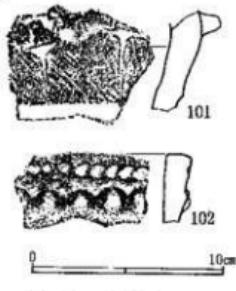
#### 1号溝址（第46図）

A～D-1～4区に位置する。この溝址は多数の小さな溝址の複合したものである。幅は17～19mを測り、調査区中央で緩やかに屈曲している。また、湧水が多く、躰も多数出土した為調査は難航し時間的制約から調査が下部まで至らない部分が多かった。

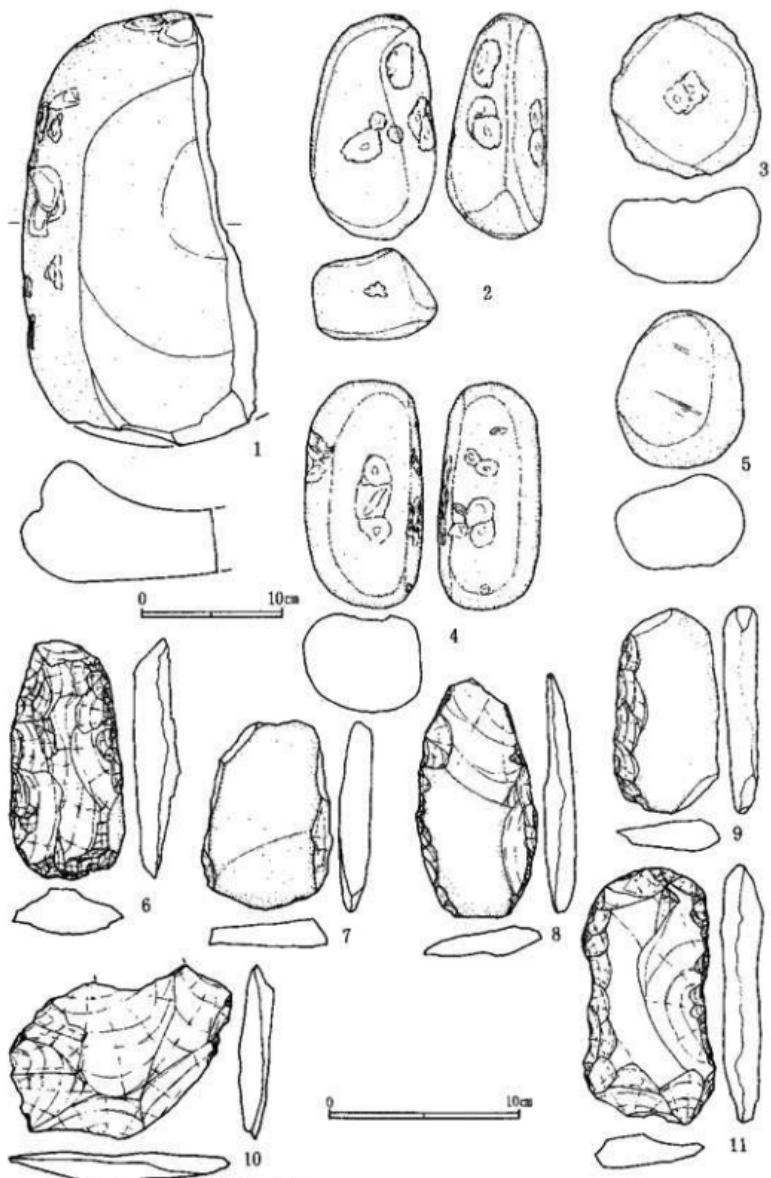
遺物が比較的纏って北東部から出土している。土器はほとんどが小破片となって出土しており復原実測できた固体は極く少ない。石器については打製石斧が集中的に川土し注目される。なお、第46図に示した土器集中範囲が二ヶ所に分かれているが、この中央に試掘時のトレンチが入っておりここから纏って遺物が出土したことからこれらは一連のものと考えられる。



第52図 土器(6)



第53図 土器(7)



第54図 石器

## 2～6号溝址（第47図）

C.D.5.6区から検出されている。これらは3号溝址が3m以上の幅をもつ以外皆幅2mもない小規模なもので、浅いものばかりである。これらの内5、6号溝址は相似した形態を取り、一連の浸食、堆積が想定される。

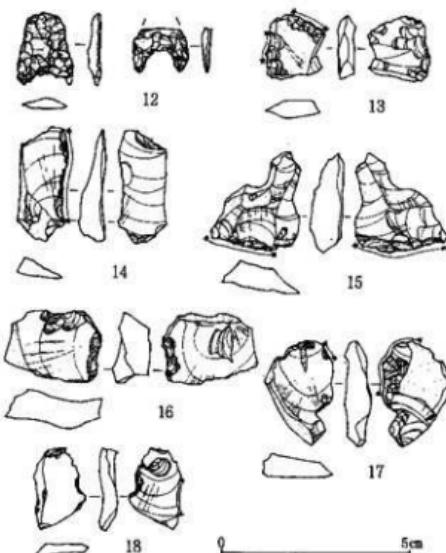
遺物はほとんど出土しておらず、3、5号溝址から僅かに出土しているのみである。混入、流れ込みと考えたい。

## 3 遺物

前述のとおり1号溝址北東部の土器集中部以外からの遺物の出土は稀薄であり、総量的にも少ないとここでは一括して提示する。

**土器** 第48図に提示したものの内1以外

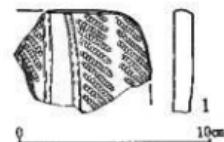
外は残存率1%以下の破片から復原実測したものである。1は口径15.7cm、推定器高21cmを測る深鉢である。太く浅い半截竹管状の工具による懸垂文等施文後、同一原体によるハの字文の施文が見られる。2、3は同一個体であろう。沈線施文後単節RLが充填されている。口縁部には幅広の沈線が巡り、波状口縁となる可能性もある。8は頸部で緩やかに屈曲す



第55図 石器

る器形を呈し、器壁は薄い。体部内外面共ケズリに近いヘラナデの後外面には単節RL、LRの施文が見られる。9は広口壺である。破片の計測から一応この様なプロポーションを想定しておいたが、該期のものとして一般的な口縁部の強く外反する肩部の張る器形を呈するものか。

第49図に提示したのは地文にハの字文をもつものである。懸垂文の残存、口縁部の横長梢円文区割が一般的な中で10の破片は懸垂文区割の欠落例であり新出の要素として評価される。また、ほとんどが沈線区割の中で31の様に隆帯のものも確実に共存しているのは興味深い。第50図は繩文地文のものを提示した。原体はほとんどが単節RLであり、それ以外は全くの例外的存在となっている。またこれらに隆帯区割が施されるものは皆無でありハの字文地文のものとは異った様相を呈している。なお57～65はその特徴的胎土及び施文原体から同一の大型深鉢の破片と考えられる。第51図66～69は条線地文、70～76は刺突文地文、77～86は押し引き文地文のもので全て同様の工具による施文が考えられる。ハの字文、繩文地文のものに比べ圧倒的に少



第56図 土製品

数となっている。これらの中で72、73、76の様に刺突文を地文とするものについてのみ隆帯による区割が見られるのは注意される。ハの字文地文の何つかと同様これらを同一層中からの出土ということを重視すればこれらに選択的に隆帯区割が残存すると評価される。第51図87、88は懸垂文区割の内部が無文のものである。また89は大型深鉢の破片でX字状把手付大型深鉢の破片と思われる。（同様の土器が昭和62年度調査された方城第1遺跡1号配石中から出土している。伊藤'87）第52図に提示したのは深鉢以外の形態をとるものである。92、93が広口壺、94～100は鉢である。この内96～100は特徴的なその胎土から同一個体と考えられる。以上が本遺跡1号溝址土器集中部を中心に検出された縄文中期末葉の土器群である。これらに混じて蛇行沈線の施文の見られるものの出土は皆無だったのはこれらの土器群のもつ時間的特徴を如実に示すものであると共にこれらの土器の廃棄が極めて短期間に行われた証拠となろう。

第53図に提示したのは上記の中葉末葉の土器群に先行するものである。これらは1号溝址土器集中部から離れて検出されたものである。

石器 第54図1は石皿である。水田の石垣中から採集された。本遺跡中唯一のものである。2～5は磨石である。内2・5は1号溝址土器集中部から検出されている。6～11は打製石斧である。内6、8、10、11は1号溝址土器集中部から集中して検出されている。第55図12、13は石鏃である。共に黒曜石製である。14～19はすべて黒曜石製の使用痕のある剥片である。

その他の遺物 第56図に提示したのは土器片鍾である。沈線区割の中に単節RLの施文が見られる。1号溝址土器集中部出土の土器群と同時期の土器片の再利用したものと考えられる。

以上の外に中～近世、近現代に属する陶磁器、瓦器類、これらに共伴すると考えられる砥石等が検出されたが時間的制約から提示できなかった。

#### 4 まとめ

ここでは1号溝址土器集中部について簡単にまとめておく。

一般に遺物の包含層の形成される成因は次の三者が考えられる。即ち第一者が地形的条件により自然に形成されたもの、第二者は廃棄等に代表される人的行為によって集積されたもの、第三者は遺跡廃絶後に造成等により形成されたものである。本例は第二者に属する。また本例の立地を見ると旧河道の中州側に立地している。この土器集中部を形成した母集団は今回の調査では明らかにできなかったが仮に1号溝址に西接する瘦せ尾根に居住していたとしてもこれらとは空間的に距離を置くこととなる。なお内容について見ると生活廃棄物としての土器片に混じて比較的狭い範囲から打製石斧が4点集中的に出土している。偶然の集中か意図したものか問題となる。ここでは後者を想定したい。またこの包含層の形成された時間幅を見ると遺物の項でも触れたがその出土土器から極めて短い時間幅で形成されたのは明らかである。

以上の諸属性からやはり今年度調査された大和田遺跡に見る諸包含層とは全く異った性格であるのは明確である。その内容については後述する。

## IV 成果と課題

ここでは大和田・大和田第2両遺跡の調査から得られた成果と課題を簡単にまとめていくこととする。

### 1 集落の構成

今回調査された大和田遺跡では前述のとおり縄文時代中期後葉の集落をほぼ明らかに出来た。これは東西約50m、南北約70mという地形的な規制を強く受けた環状集落で、その外縁の一部には土器溝りが見られた。ここでは昭和62年度調査された同時期の集落である方城第1遺跡と比較し、類似性と相異点を明らかにしていくことでその集落の特徴を明らかにしていく。

まず類似点を挙げると痩せ尾根の斜面部を中心に集落が展開しており、共にその成立過程は大きく異なるが、結果的に環状の集落を形成する。共に住居址7軒という小規模な集落でありながらこの様な集落の形態を形成したのは地形的な制約だけでなく、ある段階で森林の伐採等集落の領域を明らかにする積極的な行為があったと考えたい。遺物は共に総量が少なく、中でも祭祀性を指摘される遺物は共に石棒以外に全く出土していない。また、石器の出土量は特に少なく、中でも石皿は量遺跡共に住居址出土例が皆無である。

次に相異点を見ていく。第1点として両集落の継続する時間幅が挙げられる。方城第1遺跡は八ヶ岳V～VII期（米田1986）という時間幅をもち、更に後期初頭にも住居址は存在しないが土壙が構築されているのに対し、大和田遺跡は八ヶ岳VI～VII期という時間幅しかもたない。第2点として、方城第1遺跡からは配石遺構が検出され、集落独自の祭祀行為があったことが明らかであり、この配石下の土壙の1基からはヒスイ製大珠が出土し祭祀行為を司った人間の存在したことも想定できる。これに対し大和田遺跡からは墓壙的性格の土壙は検出されたが祭祀性を指摘しうる遺構は検出されていない。僅かに3号住居址炉周辺から石棒が出土し住居址単位での祭祀行為の存在したことを窺せるに過ぎない。第3点として環状集落の成立過程が挙げられる。方城第1遺跡の集落は頭初より住居址がある程度の空間を領有しながら結果的に環状集落を形成したのに対して、大和田遺跡は頭初ブロック状の集落形態をとるもののが次の段階で大きく転換し一気に環状集落を形成した。即ち方城第1遺跡の集落の継続性に対し大和田遺跡は集落の断絶性が指摘できるのである。

以上の諸属性の内、相異する三者からこの2つの集落は方城第1遺跡は「拠点的集落」としての性格を帯びるのに対し、大和田遺跡は「周辺集落」としての性格が強いと位置付けられる。共に住居址7軒という小規模な集落でありながら、その性格的には大きく異った集落であったと言えるのである。

### 2 出土土器の時間的位置付け

今回調査された2遺跡から出土した縄文中期後葉の大器群は大きく3段階に分けられる。1

期として大和田遺跡4、6号住居址出土土器が当てられる。深鉢は口縁部近くでやや外反する単純に底部から直線的に外上方へ立上る器形のものが目立つ。文様としては体部文様帶の渦巻文の衰退、降帯、沈線による懸垂文、蛇行沈線の盛行が見られる。地文としては圧倒的に条線文が多い。2期として大和田遺跡1、2、3、7号住居址出土土器、調査区南土器溝出土土器（一部除外）が該当する。器形的には深鉢は1期に比べ口縁部の外反が弱くなり直線的に立上るものが多く、いわゆるバケツ状の深鉢が登場する。文様としては体部文様の渦巻文の消失（7号住居址1の大型深鉢等は例外的存在で、一部の器種に選択的に渦巻文が施文されていたものと考えられる。）、文様の沈線化傾向（一部には降帯が残存する。特にハの字文地文のものに顕著にこの傾向が認められる。）、地分としては新出するハの字文が比率的にやや多く、次いで条線文、繩文、更に少數になって刺突文地文という地文の比率組成が見られる。この内条線文、繩文、刺突文地文のものについてはかなりの比率で蛇行沈線が見られるのに対し、ハの字文地文のものに蛇行沈線が施文される例は今回の調査では1片も検出されなかった。これは他の近隣の遺跡でも同様な傾向が窺われ、ハの字文地文に蛇行沈線の見られる例は例外的にしか見られない。これはハの字文地文の成立が現状では同一形式に新出したと考えられる刺突文等に比べ遅れて成立したことを窺せ、今後に細分の可能性を残すものとして考えられる。また今回の調査で検出された繩文地文のものは単節LRが主体となる。3期として大和田第2遺跡出土土器が当てられる。器形的には深鉢は2期よりも更に直線的に立上るもののが目立ち、口縁部径が小さくなる傾向が見られる。文様としては懸垂文の残存（欠落例が新出）、地文としては2期に比べ繩文地文例が多くなり、ハの字文とほぼ同数かそれを上回る程になる。また繩文は2期と逆転して単節RLが圧倒的に多くなっている。また、今回の調査でこの段階で蛇行沈線の施文の見られるものは皆無である。近隣の遺跡でもこの段階では蛇行沈線はほとんど見られなくなり例外的な存在となっている。

以上が今回調査された2遺跡から出土した繩文中期後葉の土器群の細分である。これらを従来の編年に対応させていくわけであるが、曾利式土器編年の混乱は指摘されてきた通りである。ここではそれには触れず米田氏の設定した八ヶ岳諸式との対照を試みるに止める。

1期は八ヶ岳VI期の一部に対応する。VI期として提示された資料を見るとVI期そのものと思われるが、氏は蛇行沈線の終末をこの段階においており本例2期の一部を含むことを本文中で明確にしている。しかし本例では1期とした大和田遺跡4号住と2期とした大和田遺跡7号住で調査上の不備は認めるものの、層位的にも1期と2期の時間差は検証されている。また、我々が一般に上器の組成を認定する上で基本となる廃棄時の一括性を見ても、若干の混乱は認められるものの概ねハの字文地文とするものを含む一群の上器と1期の特徴としてあげた口縁部でやや外反する直線的に立上る条線文地文の深鉢を含む一群の土器は共伴するものではない。また形式学的な相異については前述のとおりである。即ち氏のVI期の設定は形式学的、層位的にも、また出土状況からも問題のある設定であると言えよう。同様に2期は八ヶ岳VI期の一部～

VII期に対応するが、これも同様に問題のある設定である。即ち氏の設定したVII期は蛇行沈線の欠落をメルクマールとするが、これはおそらく前述した2期の細分の可能性と合致し、その新相を示す一群とはほど同時期性を示すものとして位置付けられるであろうが、現状ではその層位的な検証もなされておらず、形式学的な変化も十分把握されているとは言えない。また、その出土状況からも現状では同時存在した可能性が高く、両者と様式として分離することは困難である。即ち氏の設定したVII期は実際には現状ではその設定を認めることはできない。最後に3期としたものであるが、これは八ヶ岳Ⅶ期に対応する。その内容については破片資料がほとんどで明確ではない部分もあり、また住居址出土資料ではなくそれ以前の諸式と一律には語れない要素も確かに存在する。ここではそれ以前の土器群との形式学的変化を認め一形式を設定し、近年増加しつつある該期に属する住居址出土上器群の検討に備えることとする。

### 3 遺物の廃棄

今回の2遺跡の調査から大きく2つに分けられる遺物の廃棄が見られた。即ち住居址内への遺物の廃棄と谷部への遺物の廃棄である。ここでは後者について簡単に触れておく。

今回の2遺跡の調査から検出された遺物包含層は全部で4ヶ所である。即ち人和田遺跡南土器溜り、同東包含層、同西包含層、大和田第2遺跡1号溝址土器集中部の四者である。それぞれの概要について再び触ると第1者が尾根筋を挟んで居住域の反対側に立地したもので明確ではないがブロック状の遺物の集中の見られるのを特徴とし遺物量も多いのに対し、第2者は同様の立地条件、同規模の面積を有するのにブロック状の集中は認めにれず遺物量も少ない。第3者は稀薄な包含層で人為的行為を介在させずに地形的条件によって形成されたものと想定される。また第4者は集落との位置関係は不明であるが、地形的立地からこれとは若干離れて存在したことが想定される他、打製石斧が集中的に出土し特定の遺物を集中的に廃棄したものと評価される。

以上から第3者を除外した三者が廃棄行為の場として位置付ることが可能であるが、その内容については一律ではない。十分な資料は提出できなかったが第1、2者は集落の外縁に立地し結果的に集落の領域を明らかにしている。これは集落の中の場を強く意識した結果とも評価される。また、遺物の出土状況から日常の生活廃棄物を廃棄した場であるのはほぼ確実であろう。これに対し第4者は不明な点を多々残すが集落から離れて立地したことにより日常性を薄くし、また土器等の生活廃棄物に混じて打製石斧を集中的に出土することから単なる生活廃棄物の集積とは評価できない要素をもっている。ここではこれらの属性から第4者を非日常的な儀礼的行為あるいはこれに付随する廃棄行為によって集積されたものと想定しておく。以上が今回の調査に際する所見であるが今後資料を十分揃えて再論したい。

以上今回の調査での成果と課題の何つかについて述べてきたが、時間的制約から十分な資料提示ができなかった所が多くあった。もう一度問題点を整理した上で資料を十分活用しながら

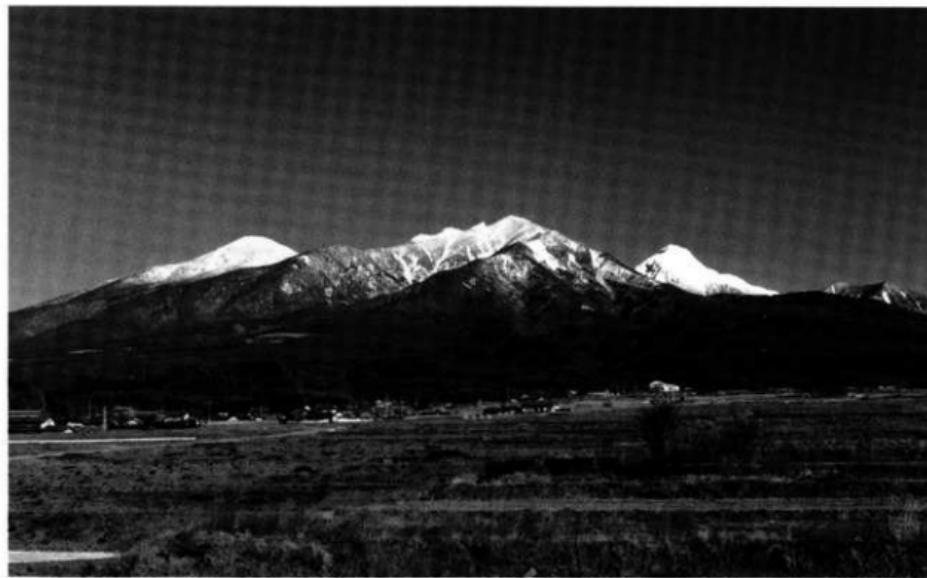
今後再論していきたい。

話は変わるが今回の調査で自分は久しぶりに縄文人と遭遇してしまった。調査中の住居址に入り込んできて「これは俺が昔住んでた所で調査の必要はない。こんなことをいつまでもやっていると俺達の負担金が上がって困る。」と言い出したのである。この人は地主の一人であったが、地主の立場が全く理解できないわけではないが、今後このような縄文人が二度と出現しない様に啓蒙活動も活発にしていかなくてはと痛感している。

#### 引用・参考文献

- 雨宮正樹 1988 「西原遺跡・当町遺跡」高根町教育委員会 島北土地改良事務所  
伊藤公明 1988 「方城第1遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所  
鵜飼幸雄 1980 「与助尼根南遺跡」茅野市教育委員会  
小野正文 1987 「第6章第1節第9項曾利式土器」「駅迎堂II」山梨県教育委員会 日本道路公团  
唐木孝雄 1986 「梨久保遺跡」岡谷市教育委員会  
唐木孝雄 1988 「第3章第16節上木ノ遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』  
柳原功一 1985 「東蛇B遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所  
柳原功一 1986 「豆生田第3遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所  
柳原功一 1987 「姥神遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所  
小栗一大 1982 「埋没谷における中期の遺物出土状況」『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度(第5分冊)』東京都埋蔵文化財センター  
後藤和民 1982 「縄文集落の概念」「縄文文化の研究8社会・文化」  
小林公明 1988 「生活用具としての土器の組成と用途」「唐渡宮遺跡」富士見町教育委員会  
小林広和 1986 「第1章二 真原遺跡の発掘調査」「武川村誌」  
小林広和 1987 「縄文時代の土壤について」「研究紀要4」山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター  
近藤英夫 1984 「幡子半遺跡」横浜道三ヶ沢ジャパンショッピング遺跡調査会  
佐野勝広 1983 「木ノ下・大坪遺跡」大泉村教育委員会  
佐野勝広 1984 「東蛇神遺跡」大泉村教育委員会  
佐野勝広 1984 「沢の田遺跡」小瀬沢町教育委員会  
木本 健 1983 「第1章 原始・古代」「小瀬沢町誌」  
末木 健 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査-北巨摩郡長坂、明野、莖崎地内」  
末木 健 1981 「曾利式土器」「縄文文化の研究 4 縄文土器II」  
末木 健 1986 「縄文時代集落の断続性」「山梨県考古学論集1」  
末木 健 1987 「縄文時代集落の断続性II-縄文中期八ヶ岳山麓の石器組成より-」「山梨県考古学会誌」創刊号  
末木 健 1987 「金の尾遺跡 無名塚(きつね塚)」山梨県教育委員会 日本道路公团  
田代 孝 1987 「御藏地遺跡」山梨県教育委員会 山梨県土木部  
長沢宏昌 1987 「第IV章 まとめ」「駅迎堂II」「山梨県教育委員会 日本道路公团  
中野修秀 1984 「土器捨て場考I」「日本考古学研究所集報」VI  
中村由克也 1988 「八ヶ岳山麓の旧石器時代遺跡」「八ヶ岳山麓の第4系」地団研専報34  
新津 健也 1980 「山梨県金牛遺跡」「日本考古学年報」33  
新津 健也 1987 「寺所遺跡」山梨県教育委員会  
平野 修 1985 「根古屋遺跡」白州町教育委員会 島北土地改良事務所  
武藤雄六 1978 「曾利」「富士見町教育委員会  
山形真利子 1987 「第6章第1節 土器捨てばの研究」「駅迎堂II」山梨県教育委員会 日本道路公团  
山梨大学考古学研究室 1978 「御所遺跡-第2次発掘調査報告書」  
山梨大学考古学研究室 1981 「御所遺跡-第2次発掘調査報告書」  
山内清男 1979 「日本先史土器の縄文」先史考古学会  
米田明訓 1986 「第4章第1節 縄文時代の遺跡と遺物」「柳坪遺跡」山梨県教育委員会 日本道路公团

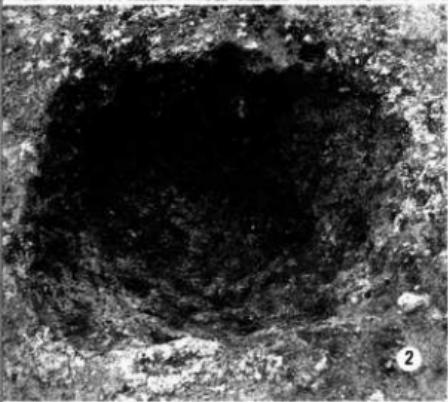
# 図版



遺跡遠景



1



2



3



4

- 1 大和田遺跡 1号住居址  
2 " 1号住居址 炉  
3 " 2号住居址 遺物出土状況  
4 " 2号住居址



1

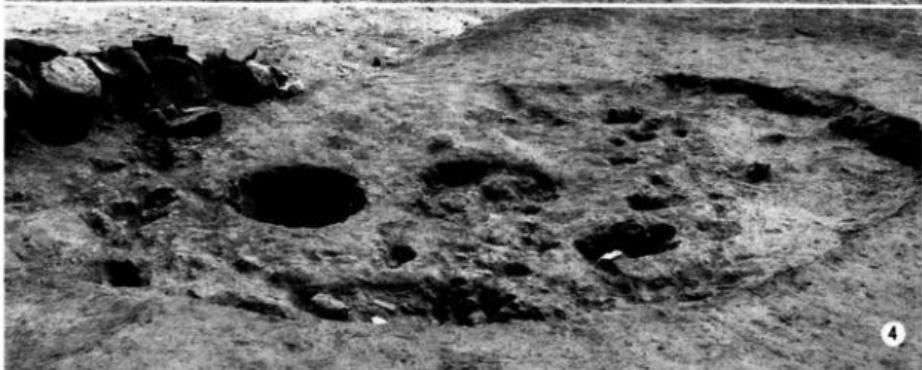


2

- 1 大和田遺跡 2号住居址 炉  
2 " 2号住居址 遺物出土状況  
3 " 3号住居址 遺物出土状況  
4 " 3号住居址



3



4



1 大和田遺跡 4号住居址

2 " 4号住居址 遺物出土状況

3 " 4号住居址 遺物出土状況

4 " 4号住居址 炉

5 " 5号住居址 炉





1 大和田遺跡 5号住居址  
2 n 6号住居址

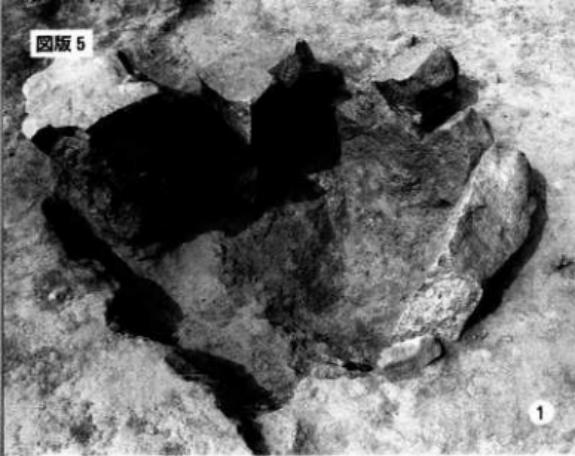
3 大和田遺跡 6号住居址 遺物出土状況  
4 n 6号住居址 遺物出土状況



3

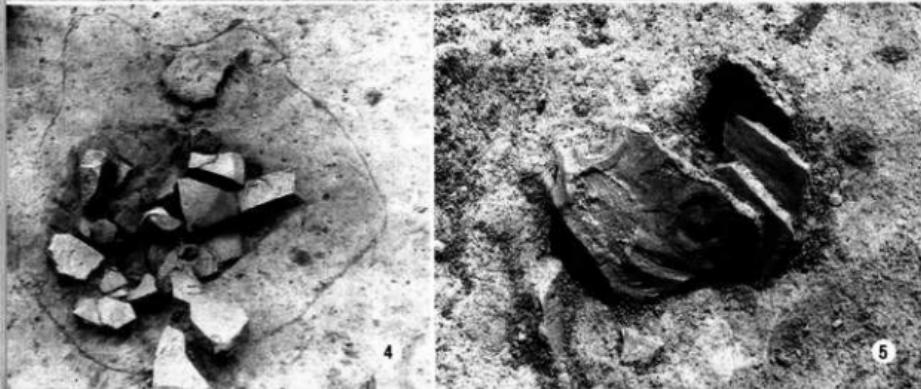
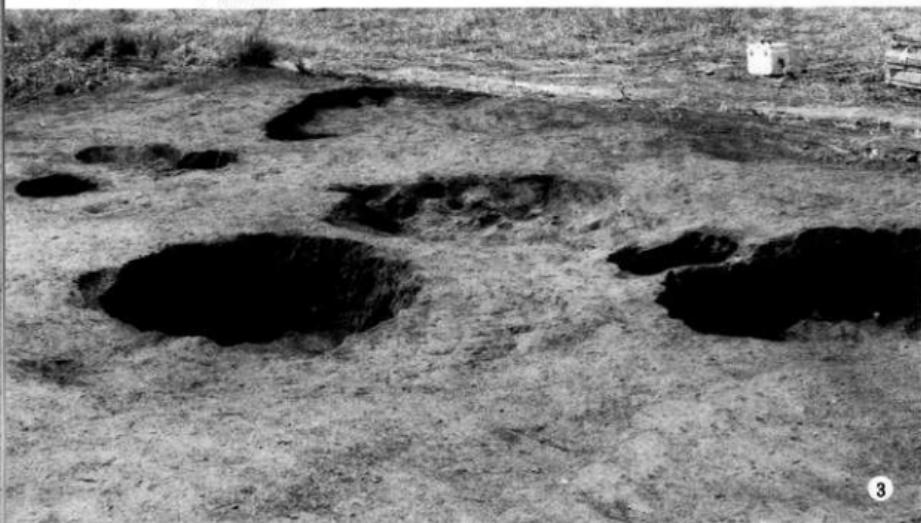


4



1 大和田遗址 6号住居址 炉  
2 " 6号住居址 埋甕  
3 " 7号住居址

4 大和田遗址 7号住居址 炉  
5 " 7号住居址 P1-1 上面



4



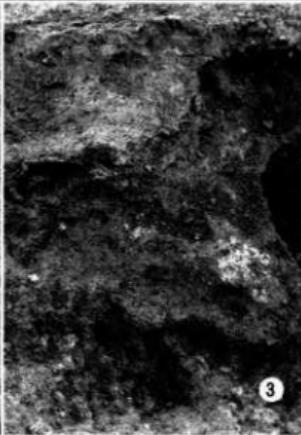
5



1



2

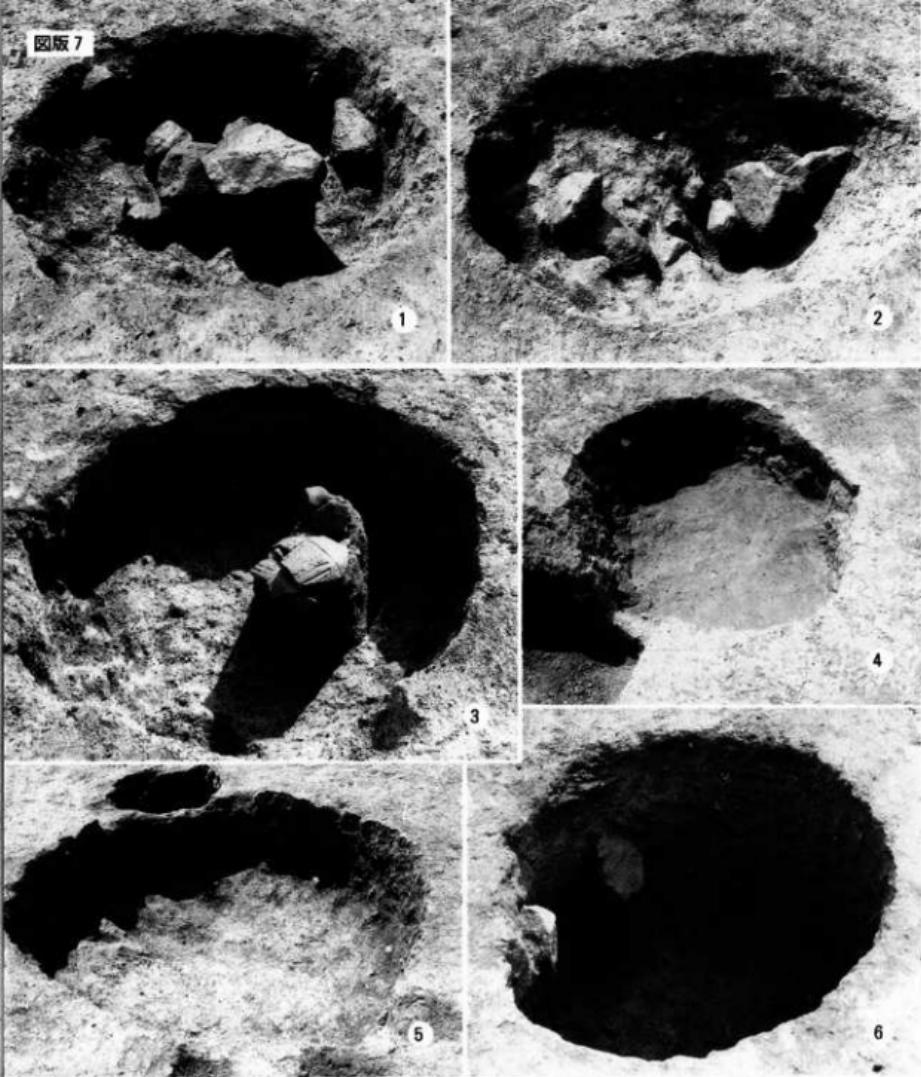


3

- 1 大和田遺跡特殊土坑  
2 同 遺物出土状況  
3 同 焼土、  
炭化物分布  
4 大和田遺跡作業風景



4



1 大和田遺跡 1号土坡  
 2 同 2号土坡  
 3 同 5号土坡  
 4 同 26号土坡  
 5 同 63号土坡  
 6 同 59号土坡  
 7 大和田遺跡近景  
 (中央→南)



1 大和田遺跡近景（南→北）

2

3 大和田遺跡近景（中央→東）

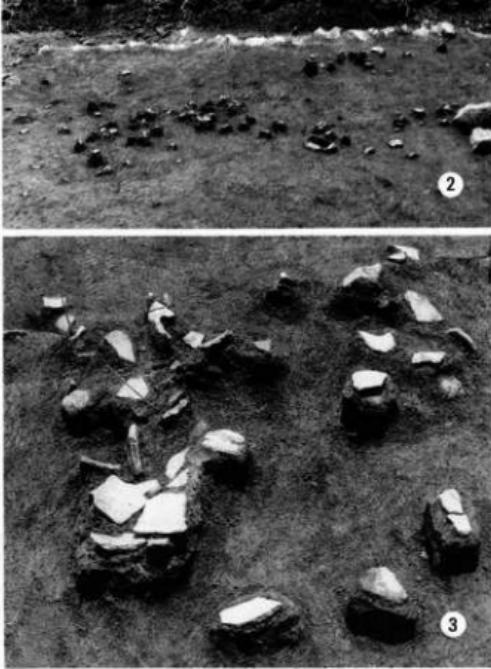
2



3



1



2



4



5

- 1 大和田遺跡 1号トレンチ
- 2〃 南土器窯
- 3〃 同遺物出土状況
- 4〃 同近景
- 5〃 2号トレンチ



1



2



3

1 大和田遺跡東包含層  
及び3号トレンチ

2 大和田遺跡4号トレンチ

3 ノ 5号トレンチ

4 ノ 現況



4



1 大和田第2遺跡全景

2 " 1号溝址

3 大和田第2遺跡1号溝址





1

1 大和田第2遺跡1号溝址

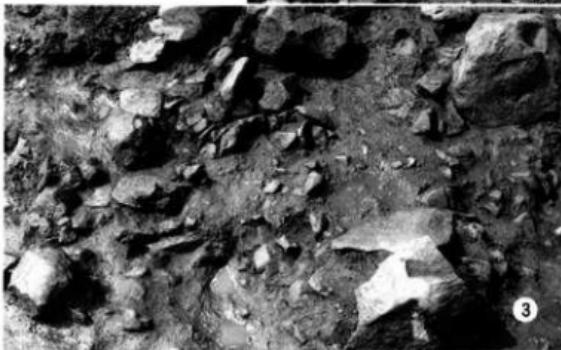
2 " 同上

3 " 同遺物  
集中部

4 " 同上



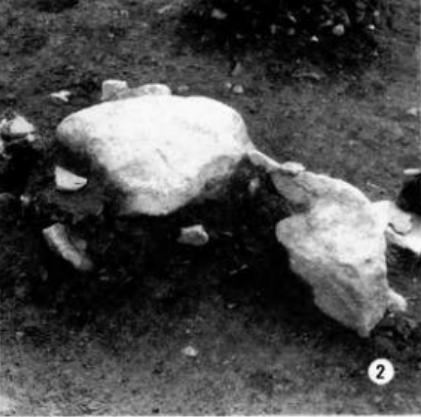
2



3



4



1 大和田第2遺跡1号  
溝址遺物集中部

2 " 同上

3 " 同上

4 " 3号  
溝址





1 大和田第2遺跡5・6号  
溝址

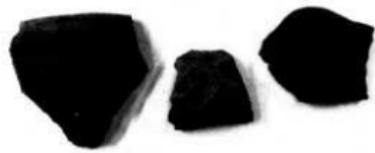
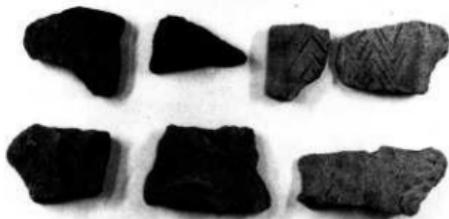
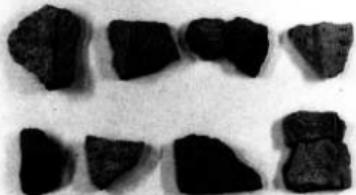
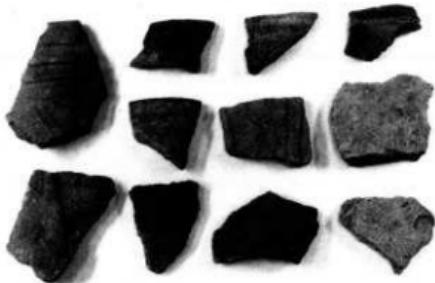
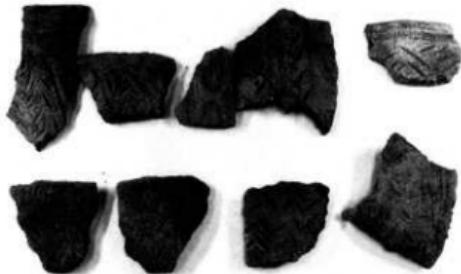
2 " 作業風景

3 " 現況

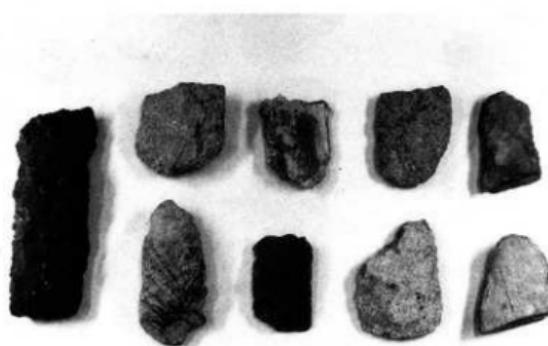




大和田遺跡 出土土器



大和田遺跡 谷部出土土器



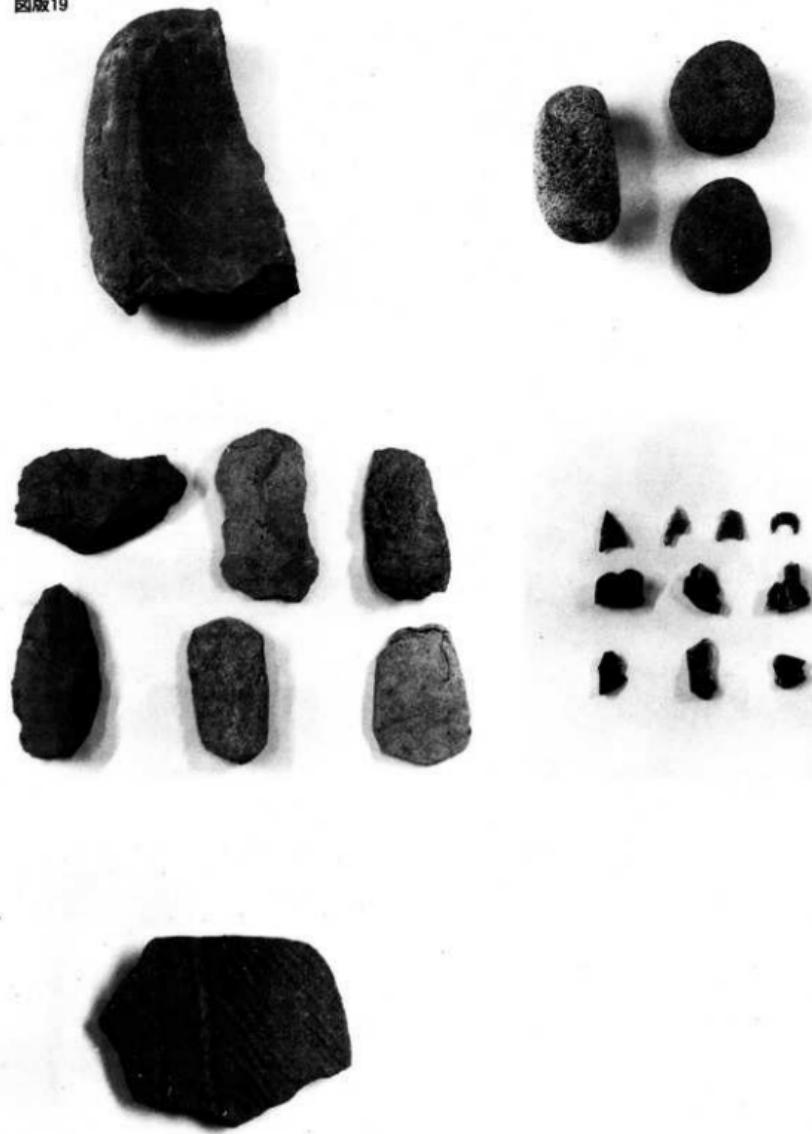
2号住居址炉址内  
出土烧成粘土块



大和田遺跡 出土石器・土製品



大和田第2遺跡 出土土器



大和田第2遺跡 出土石器・土製品

---

## 大泉村埋蔵文化財調査報告書 7集

発行 平成元年3月31日発行

編集 大泉村教育委員会

〒409-15

山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025

T E L 0551-38-3115

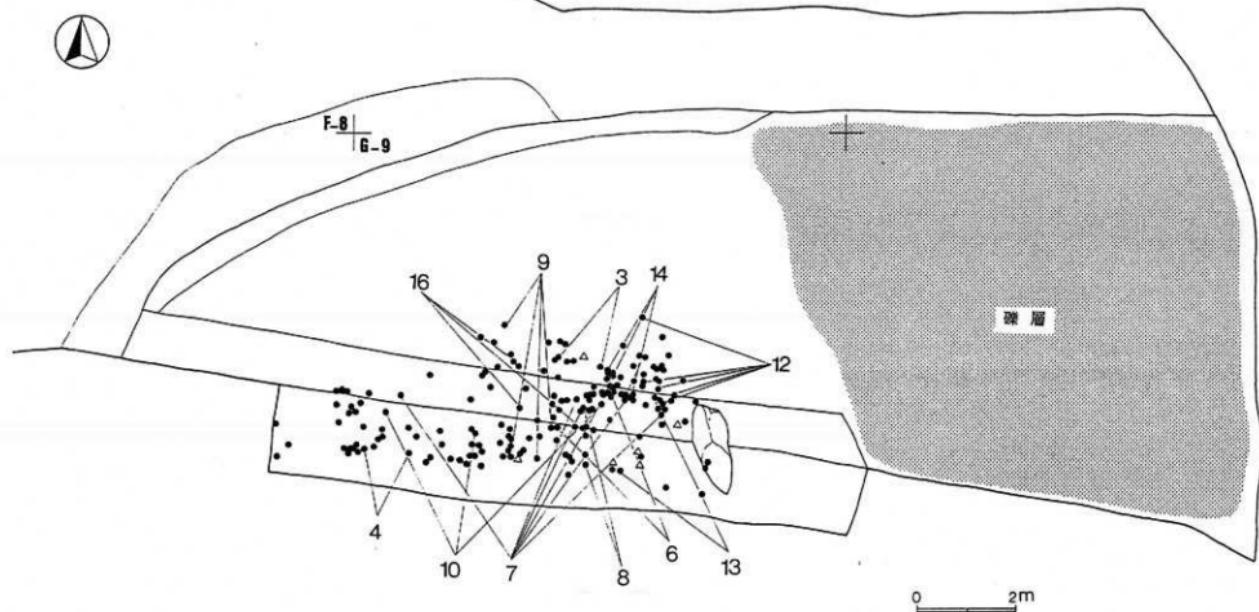
印刷 銀 ヨネヤ 印刷

甲府市丸の内一丁目14-6

T E L 0552-35-4311㈹

---

付 図



• 土器  
△ 石器

大和田遺跡南土器溜り遺物接合関係図 ( s = 1 / 100 )

